やいけないわ。うんと大きな大砲もね。

デュノア　（彼女の馴馴しさに思はずにやりとして、彼女の言葉を眞似て）　さうよ、君。だが、勇敢な精神と頑丈な梯子さへあれば、どんな石壁だつて乘越えられるんだよ。

ジョウン　砦へ着いたら、あたしが眞つ先に梯子を登るわ、私生兒さん。あんた、あたしについて來なくちや駄目よ。

デュノア　參謀にそんな事を要求してはいけない。我先にと高名を爭ふ事の出來るのは中隊や分隊の士官だけだ。それに、僕は君を聖者として歡迎してゐるので、軍人として歡迎してゐるんぢやないと言ふ事を知つてくれなくちや困るよ。僕の手許には、いざと言ふ場合には、命令の儘に動く命知らずの荒武者が澤山ゐるのだ。

ジョウン　あたしは命知らずの荒武者ぢやないことよ。あたし神樣の僕（しもべ）だわ。あたしの劍は神聖で、聖キャサリンの御堂の祭壇の陰で見つけたの。神樣があたしのために其處へ隱しておいて下さつたのだわ。ですから、それで人を切つてはいけないの。あたしの心は勇氣で充ち充ちてゐるが、怒りで充ちてやしない。あたし先頭に立たう。さうすれば、あなたの部下がそれに

續いて來るでせう。あたしの出來る事と言へばそれだけよ。でも、どうあつてもあたしそれをしなくちやいけない。あたしを留めてはいけません。

デュノア　萬事いい時機を見はからつて。我軍は橋を渡つて逆擊したつて、あの砦を占領する事が出來ないのだ。河を渡つて、こつち岸から英吉利軍の背後を突かなきやいけないのだ。

ジョウン　（軍人的感情が現はれて來て）では、筏をこさへて、それに大砲を載せて、あんたの軍隊に河を渡らせてあたし達のところへ寄越すといいわ。

デュノア　筏の準備は出來てゐる。兵士も乘りこんでゐる。ただ神樣のお味方を待つてゐるのだ。

ジョウン　何と仰しやるの。神樣はみんなを待つていらつしやるのよ。

デュノア　では、神樣のお力で西風を吹かして貰ひたいなあ。味方の船は下流にあつて、風と流に抗つて遡つて來る事が出來ないのだ。我々は神樣が風向きを變へて下さるまで待つてゐなきやならないのだ。さあ、來給へ、一しよに敎會へ行かう。

ジョウン　あたし敎會は好きです。でも、英吉利兵はお祈りには屈服しはしないでせう。英吉

利兵と來ちや、毆つたり突いたりする外はなんにも知らないんだもの。あたし、英吉利軍を打破るまでは敎會へは行きますまい。

デユノア　君は行かなくちやいけない。敎會で君にして貰ひたい用があるのだ。

ジヨウン　どんな用？

デユノア　西風が吹くやうに祈るのだ。僕はお祈して、銀の燭臺を二本獻じたのだ。然し僕のお祈にはおしるしがなかつた。君ならいいだらう。君は年も若く、淸淨無垢なのだから。

ジヨウン　ええ、さうね、あんたの仰しやる通りだわ。あたし、お祈しよう。神樣に西風を吹かして頂くやうに、聖キヤサリンにお願ひしよう。さあ早く、敎會へ案内して頂戴。

小姓　（烈しくくしやみする）はくしよう！

ジヨウン　あら、何つて子だらう。さあ行きませう、私生兒さん。

二人は出てゆく。小姓、續いて行かうとして立上る。彼は楯を取上げ、同じく槍を取らうとして、小旗が今や東の方へと吹き流れてゐるのに氣がつく。

小姓　（楯を下ろし、二人の後から昂奮して叫ぶ）旦那樣。旦那樣。お孃樣。

デユノア　（走り歸つて）何だい、かはせみかい。（河の上方を熱心に探し求める）

ジヨウン　（二人の側に寄つて）まあ、かはせみ！　何處に？

小姓　いいえ、風が、風が、風が。（小旗を指さして）このためでした、わたしがくしやみしたのは。

デユノア　（小旗を見ながら）風が變つたなあ。（十字を切つて）神樣のお言葉だ。（跪いて、指揮捧をジヨウンに手渡して）あなたこそ我が王軍の指揮官だ。わたしはあなたに仕へる一兵士になら う。

小姓　（河の下流を眺めながら）船が岸を離れました。見事に水を切つて遡つて來ます。

デユノア　（立上つて）さあ、愈々砦を攻めるのだ。あなたはさつき、わたしに跟いて來いと仰しやつたが、先頭に立つ勇氣がありますか。

ジヨウン　（わつと泣き出して、デユノアを兩手で抱きしめて、その兩の頰に接吻しながら）デユノア、親しい戰友、あたしの力になつて頂戴。あたし淚で眼が見えないの。梯子にあたしの足をかけさせて、「登れ、ジヨウン」と言つて頂戴。

デュノア　（彼女を引き立てて）涙なんか氣にかけずに、さあ、轟く砲火を目がけて。

ジョウン　（勇氣に燃えて）あゝ！

デュノア　（自分と一しよにジョウンを引き立てながら）神のため、聖ドゥニのため！

小姓　（癇高い聲で）乙女！　乙女！　神と乙女！　ばんざあ――い！　（楯と槍を急ぎ取上げ、氣違ひのやうに昂奮しながら、二人の後を小踊りして追うて出てゆく）

第四場

英軍の陣營に於ける天幕。牡牛のやうな頸すぢの、五十歳になる英吉利の牧師が、卓の傍の腰掛に腰を下ろして、一心に書きものしてゐる。卓の反對側には、四十六歳になる、圖體の大きい貴族が立派な椅子に腰をかけて、美しい飾りのある祈禱書の頁をめくつてゐる。貴族は樂しさうに書物を見入つてゐる。牧師は心の怒りを壓へつけようと努力してゐる。貴族の左手には、誰も坐つてゐない革製の腰掛。彼の右手には卓。

貴族　うむ、これこそ僕が手藝と呼ぶところのものだ。愛らしい本より精巧なものはこの世にありはしない。美しい縁をとつて、巧みに並べた眞黒な文字の配列、巧妙に挿入した挿繪。然し、今日では、人々は本を眺める代りに讀むのだ。君は鹽豚や麥の糠の注文書を書き散らしてゐるが、書物はその注文書の一枚と同樣だと言つてもいいだ。

牧師　閣下、あなたは我々の立場をひどく冷淡に考へてゐられると申さねばなりません。實際、ひどく冷淡に。

貴族　（高慢な樣子で）どうしたと言ふのさ。

牧師　どうしたつて、閣下、我々英吉利軍は敗北してゐるぢやございませんか。

貴族　そんな事もあらうさ。敵が負けると決つてゐるのは、歷史の書物か俗謠だけのことだよ。

牧師　だが、我軍は再三再四續けさまに敗北してゐるのです。先づ第一に、オルレアン――

貴族　（蔑むやうに）あは、オルレアンか。

牧師　あなたは何を仰しやるおつもりか、わたしには分つてゐます、閣下。今度の事たるや、明らかに巫術魔法の仕業です。然し、我軍は依然として敗北してゐるのです。ジャルゴオに於ても、ムウンに於ても、ブウジャンに於ても、オルレアン同樣でした。而も、今度は、パテエに於て我軍は殺戮せられ、ジョン・トオルバット卿は捕虜として召捕へられたのです。（ペンを投げ棄て殆んど涙に咽んで）わたしはそれを心に感じます、閣下。深く心に感じます。わたしは、我國人が少數の他國人のために敗北するのを見るに忍びません。

貴族　あゝ。君は英吉利人だつたね。

牧師　さうぢやありません、閣下。わたしは紳士です。然し、閣下と同樣、英吉利に生れまし

た。それはどうでもいゝ事ぢやありません。

貴族　君は故國に執着を持つてゐるね、ええ。

牧師　あなたはわたしに皮肉を言つて、それを悦んでいらつしやるのでせう。平氣でさうなさるのも、身分高きあなたの特權かと思ひます。然し、閣下もよく御存知のやうに、わたしは農奴のやうに賤しい考で故國に執着してゐるのではありません。けれども、わたしは故國に對して感慨無き能はざる者です。（次第に昂奮して）わたしはそれを恥しいとは思ひません。そして、（荒々しく立上つて）若しかかる事がこの上續くならば、誓つて、わたしはこの法衣を、惡魔に投げ與へて、自ら武器をとつて、この兩手であの忌々しい魔法使を絞め殺してやらう。

貴族　（上機嫌で彼を笑ひながら）君はさうするのも好からう。若し我々がそれ以上何事も出來ないなら。然し、まだいけない、まだいけないよ。

牧師　（ぷり〳〵しながら自分の席へ戻る。）

貴族　（氣取つて）わたしは魔女なんかなんとも思つてやしないよ——君も知つてるやうに、わたしは聖地へ巡禮して來てゐるのだ。天にいます神は、神自らの譽のためにも、たかが田舍の

魔法使の女にわたしが負かされるやうな事をさせはなさるまい。——だが、オルレアンの私生兒（ベスタアド）は、一破りに破るには、手剛い胡桃（くるみ）だ。それに、あいつも聖地へ行つてゐるとすれば、その點では、神の譽は我々の間では優劣がない譯だ。

牧師　あいつは、たかがフランス人に過ぎません、閣下。

貴族　フランス人だと！　君は何處でそんな言ひ廻しを覺えたのだ。我々の仲間が自分達のことを英吉利人と呼び始めたやうに、バアガンデイやブレエトンやピカアドやガスコンの連中は自分達のことをフランス人と呼び始めたのか。あいつ等は、實際フランスやイギリスを自分達の國のやうな口の利き方をしてゐるんだ。自分達の國のやうにね、さう言つてもよければ。若しそんな考へ方が跋扈して來たら、僕や君はどうなると思ふね。

牧師　何故ですか、閣下。一向差支無いぢやありませんか。

貴族　誰も二君に仕へる事は出來ないのだ。若しみんなが、かう言ふ風に自分達の國に仕へると言ふ考に捉はれるとしたら、封建君主の權威はおさらばだ。教會の權威もおさらばだ。取りも直さず君も僕も破滅だよ。

牧師　わたしは教會の忠實な僕でゐたい。戰勝王が定めてくれたストガンバアの男爵とわたしとの間にはたつた六人の從兄弟がゐるだけである。然し、そのために、わたしが手をこまねて、英吉利軍がフランスの私生兒やルジ・シャンパァニュの魔法使に打負されるのを傍觀すべき理由があるでせうか。

貴族　靜かに、まあ靜かにし給へ。我々は時機を見て、魔法の女を燒殺し、私生兒を打負さうぢやないか。實際、僕は今のところ、ボオエィの僧正を待つてゐるのだ、僧正と一しよに火焙りを行ふ準備をするためにね。僧正は、あの女の一味徒黨のために管轄教區から追ひ出されたのだ。

牧師　あなたが先づあの女を捕縛なさらなくちやなりません、閣下。

貴族　でなければ、あの女を買取らなくちやね。僕は王樣の身の代金を提供しよう。

牧師　王樣の身の代金を！　あんな詰らない女のために！

貴族　誰だつて、儲けは殘してやらなくちやいかんよ。シャルルの部下の誰かが、あの女をバアガンディの連中に賣りつける。バアガンディの連中が、そいつを我々に賣り拂つてくれるのさ。さうすりや、仲に立つて僅かの手數料をあてにする三四人の仲介人が出來ようつて譯さ。

牧師　それは怪しからん。それは、あの猶太の惡黨のする事です。あいつ等は、金が人手に渡る度にいくらかにしてゐるんです。若しわたしの自由になるものなら、キリスト教國に猶太人を一人も生かしてはおきません。

貴族　どうしてだね。猶太人は一般に、ものの値段をきめてくれるのだ。僕の經驗では、あいつ等は君に金を拂はせるかも知れないが、品物はちやんと渡してくれるのだ。ただでものを貰ひたがるのは、キリスト教徒にきまつてゐる。

小姓現はれる。

小姓　尊貴なるボオエィの僧正、コオション閣下がお見えでございます。

齡六十歳ばかりのコオショゥがはひつて來る。小姓退く。二人の英吉利人は立上る。

貴族　(心情を吐露せる鄭重さを以て)　これは〳〵、僧正、ようこそお出で下さいました。初めてお目にかかりますが、わたくしはリシャアル・ド・ボオシャン、伯爵ウオリクでございます。

コオション　貴族である閣下の御名聲は兼々お伺ひしてゐます。

ウオリク　こちらの牧師は、ジョン・ド・ストガンバア師でございます。

牧師　（流暢に）ジョン・ボウヤア・スペンサア・ネヴィル・ド・ストガンバアでございます、閣下。神學得業士、ウインチスタアの大僧正閣下の御印章の保管者でございます。

ウオリク　（コオションに）閣下は、あの方をばイギリスの大僧正とお呼びになつてゐられる事と思ひます。我々の王陛下の叔父君に當られるのです。

コオション　ジョン・ド・ストガンバア殿、わたしはあの大僧正閣下と大いに懇意にしてゐます。（彼は牧師の方へ手を差伸べる。牧師はその指輪に接吻する。）

ウオリク　どうぞお掛け下さい。（彼は自分の椅子を、コオションのために卓の上座に置く）

コオションは重々しく身を屈め、上座につく。ウオリクは革の腰掛を無造作にとつて、以前の場所に腰を下ろす。牧師は自分の席へ戻る。

ウオリクは、僧正に對する尊敬を考に入れて、自分は第二の席についたけれども、當然な事として先づ自分から口を開いて事件の進行に取りかかる。彼は以前のやうに温情に充ち、ゆつたりとしてゐるが、その聲には、これから事務に取りかかるのだと言ふ新しい調子がこもつてゐる。

ウオリク　さて僧正閣下、あなたにもお分りでせうが、我々は今、不運な時に遭遇してゐるのです。シャルル殿下はランスで即位の式を擧げる事になつてゐます、事實これはあのロレエヌの若い娘の力に依るものと言つて差支無いのです。ところで――わたしはあなたを欺き、あなたの希望にへつらふのではありませんが――我々はそれをどうする事も出來ないのです。この即位たるや、シャルルの立場に重大な關係を及ぼすだらうと思ひます。

コオション　それは疑の無いところです。これはあの娘にしちや上出來でした。

牧師　（再び昂奮して）我々は男らしく負かされたのではありません、閣下。英吉利人は、未だ曾つて男らしく戰つて負けた事はないのです。

コオション　（少し眉をあげたが、急いで平靜な顏に歸る。）

ウオリク　此處にゐるこの友達は、あの女は魔法使だと言ふ考を有つてゐるのです。あの女を宗教裁判に訴へ、魔法の罪で火焙りに處するのは、僧正閣下の職責かと存じますが。

コオション　若しあの女がわたしの管轄教區で捕縛されれば、勿論さうです。

ウオリク　（話がうまく進んで來たと思つて）全く、その通りです。ところで、あの女が魔法使だ

と言ふことは、何等合理的な疑をさし挾む餘地がないと思ひます。

牧師　どう見ても疑ふ餘地がありません。明らかに魔女です。

ウオリク　（彼が口を挾んだのを優しく咎めながら）我々は僧正の御意見をお伺ひしてゐるんだよ、ジョン君。

コオシヨン　わたし達は、此處にゐる我々の意見のみでなく、フランスの裁判所の意見を——偏見と言ふ方がお望みとあらば、その偏見をも——顧慮する必要がありはしないでせうか。

ウオソク　（訂正して）カソリックの宗教裁判所と仰しやるのでせう、閣下。

コオシヨン　カソリックの裁判所は、假令その職責や靈感は神聖であるにしろ、他の裁判所同様、神ならぬ現世の人間で組織されてゐるのです。そして、その人達が最近流行の言葉で言へば所謂フランス人であるなら、英吉利軍が一フランス人のために敗北したといふ單なる事實だけでは、今度の事件には魔法が働いてゐたと信じさせる事が出來ないだらうと思ふのです。

牧師　何と仰しやるのです。あの有名なジョン・トオルバット卿自身が、ロレエヌのとぶから匐ひ上つた賤しい女のために、打負かされ、實際捕虜になつてゐるのに。

コオシヨン　ジョン・トオルバット卿は大膽不敵な軍人であるのは、誰知らぬ者もありません。然し、才能ある將軍であるかどうか、わたくしの知りたいと思ふところです。それに、トオルバット卿はあの娘のために敗北されたと言へば、あなた方のお氣に召す事と思ふが、我々のうちには、今度の戰功を少しはデュノアに歸したいと思ふものもないとは限りません。

牧師　（輕蔑するやうに）あんなオルレアンの私生兒に！

コオシヨン　話は少し古いが——

ウオリク　（口を挾んで）あなたが何を仰しやるおつもりかわたしには分ります、閣下。デュノアはモンタルヂでわたしを打破つた事があります。

コオシヨン　（お時宜をして）事實デエノアは非常に才能ある指揮官であるのは明白な事と思ひます。

ウオリク　閣下は實に禮儀の花とも申すべき方です。我々の立場に立つて見ましても、トオルバットは單なる猪武者であつて、パテエで捕虜になるのもあの男には當然なことのやうに思へるのです。

牧師　（苛立って來て）閣下、オルレアンでは、あの女は英吉利軍の放つた矢に喉を貫かれて、その痛みのために子供のやうに泣いたと言ふぢやありませんか。それは致命傷だつたのです。そして、我軍が眞の英吉利人らしく振舞つて、あの而も、あの女は一日中戰つてゐたのです。そして、我が城壁に近寄つて來たのです。そして、我が兵士が體が痺(しび)れて、射る事も突く事も出來なくなつた時、フランス軍は我軍を襲撃して、橋へ追ひやり、時を移さず火をかけたので、橋は燒け落ちて、我軍は河へ墜落して、溺死する者が河を埋める位だつたのです。これが、あの私生兒の戰略だつたのですか。それとも、この炎は、魔法の作り出した炎なのですか。

ウオリク　どうぞ、ジョン君の猛烈な言葉遣ひを御容赦下さい、閣下。然し、この男は今度の我々の事件を述べてくれたのです。デュノアは偉大な將軍である事は、我々も認めるところでありますが、何故デュノアは、魔法使の女が現はれる迄は手をこまねてゐたのですか。

コオション　わたしは、あの女に何か超自然的な力が働いてゐなかつたとは言ひはしません。然し、その白旗に書いてあつた名前は、惡魔(セイタン)や魔王(ベエルゼバブ)の名前ではなく、我々の主と聖母の貴き

御名であつたのです。ところで、溺死されたあなた方の指揮官——たしかクラッ・ダと言ふ名前かと思ひますが——

ウオリク　グラスデエル。ウイリアム・グラスデエル卿です。

コオション　グラス・デル、ああ、さうですか。あの方は聖者ではなかつたのです。我軍の多くは、あの方は聖女に反抗した天罰で溺死したのだと考へてゐます。

ウオリク　（ひどく半信半疑な樣子をし始めて）では、一體我々はその事實から如何なる結論を下すべきでせうか。あの娘のためにあなたは改宗なさつたのですか。

コオション　若しさうだとすれば、わたしは、安心して、此處へ、あなた方の面前へ來るやうな事はしなかつたでせう。

ウオリク　（穩かに反對しながら）然し、然し、閣下。

コオション　若し惡魔があの娘を利用したとしたら——わたしの考では、惡魔は——

ウオリク　（安心して）ああ、ジョン君、聞いてゐるか。閣下は我々の失望するやうな事を仰しやる筈はないと思つてゐた。差出口をして失禮でした。さあ、續けてお話し下さい。

コオション　若しさうだとすれば、惡魔は諸君の考へてゐられたよりも遠大な見論見を有つてゐるのです。

ウオリク　何ですつて。どんな風に？　よく聞き給へ、ジョン君。

コオション　若し惡魔が一人の田舍娘を墮落させようと思つたのなら、そんなたやすい仕事を遣り遂げるために、六度も戰爭に勝つやうな事をするでせうか。いや見かけ倒しの小僧つ子の惡魔は、娘を墮落させようとするなら、墮落させるだけで、そんな大それた事が出來る筈はありません。暗黑界の魔王は、こんな安つぽい賤しい仕事に首をつゝこみはしません。あいつは襲ひかゝるなら精神界をあまねく支配してゐるカソリック教會を襲ふのだ。墮落させるなら、全人類の靈魂を墮落させるのだ。その恐ろしい計畫に對して、教會はいつも見張に立つてゐるのです。そして、わたしは、あの娘をこの計畫の道具の一つであると考へます。あの女は魂を吹き込まれたのだ、然し、惡魔の魂を吹き込まれたのです。

牧師　わたしは、あの女は魔法使だと言つてゐるぢやありませんか。

コオション　（烈しく）あの女は魔法使ではない。あれは異端です。

牧師　それにどれだけ區別があるのですか。

コオション　あなたが、神に仕へるあなたが、そんな事を訊くのですか。あなた方英吉利人は心が妙に鈍つてゐられる。あなた方が魔法だと言はれるものは殘らず、自然な解釋で說明がつくぢやありませんか。あの女の奇蹟は兎にまで及びはしないでせう。あの女自身も奇蹟だとは言ひはしないのです。あの女の勝利は、あの女が忌々しいグラス・ベルや氣の狂つた牡牛のトオルバットよりいゝ頭を有つてゐたと言ふ事、そして、信仰が現はす勇氣は、假令それが間違つた信仰であつたにしろ、怒の現はす勇氣よりは常に强いと言ふ事を證據立てゝゐるに過ぎないぢやありませんか。

牧師　（殆んど自分の耳を信じる事が出來ない樣子で）閣下は、ジョン・トオルバット卿、スルウスバリの伯爵領の後繼者を、氣の狂つた牡牛に較へられるのですか?!

ウオリク　それは君には不適當に見えるかもしれないよ、ジョン君、君が男爵になるにはまだ六つの隔たりがあると同じやうにね。たが、わたしは伯爵で、トオルバットはたかが準男爵に過ぎないんだ、どうもこの比較は認めざるを得ないよ。（僧正に）ところで、閣下、魔法のお話

なら、わたしは御免を蒙りませう。だが、どうあつてもあの女は火焙りにしなきやなりません。

コオション　わたしはあの女を火焙りにする事は出來ません。教會はその命を奪ふ事は出來ません。そして、わたしの何よりの務は、あの娘の救の道を求める事です。

ウオリク　尤もです。だが、あなたは時には人を火焙りになさるでせう。

コオション　そんな事はありません。教會が異端の徒を命の樹から枯れた枝として切り取る場合には、異端の徒をば俗人の手に渡すのです。教會は、俗人の眼から見て行つても差支ないと思ふやうな事には、何等關與しないのです。

ウオリク　仰しやる通りです。では、わたしは今度の事件で、俗人の役を務めませう。さあ、あなたの仰しやるその枯れた枝を渡して下さい。わたしは、それを燒く火を準備するやうに取計ひませう。あなたが教會に關する責任をお有ち下さるなら、わたしは俗人に關する責任を有つ事に致しませう。

コオション　（心に怒を燃やしながら）わたしは何事にも責任を有つ事は出來ません。閣下は、教會を單なる政治上の便宜としてお取扱ひになる傾がありはしませんか。

ウオリク　（微笑し、妥協的に）英吉利ではさやうな事はありません。

コオション　英吉利では他の何處の國よりもひどいでせう。いや、閣下、あの田舎娘の魂は、神の王座の前では、あなたやあなたの王の魂と異ることなき價値があるのです。ですから、わたしの何よりの務はそれを救ふ事です。あなたがわたしをにやにや笑つておいでになるのには我慢が出來ません、わたしが無意味な言葉を繰返してでもゐるやうに、わたしがあの娘をあなたに手渡す事にお互の間に十分了解がついてでもゐるやうに、わたしを笑つておいでになるのには我慢出來ません。わたしは單なる政治的な僭正ではありません。あなたが名譽を重じられるやうに、わたしは信仰を重じます。ですから、若し、あの洗禮をうけた神の子が、救へ到る逃げ道でもなるなら、わたしはあの娘を其處へ導きませう。

牧師　（かつとなつて立上つて）あなたは裏切者です。

コオション　（すくつと立上つて）それは嘘です。（怒で身を顫はしながら）あなたはあの女のなしたやうな事を敢てなさるなら——あなたの國を神聖なカソリック教會の上に置かうとなさるなら——あなたはあの女と共に火焙りの刑に問はれるのですぞ。

牧師　閣下、わたしは――わたしは少し言ひ過ぎました。わたしは――（謙譲な身振をして腰を下ろす）

ウオリク　（氣配はしげに立上つてゐたが）閣下、ジョン・ストガンバアがかゝる言辭を弄したのをお詫び致します。裏切者と言ふ言葉は、イギリスとフランスでは意味が異つてゐるのです。あなたの國の言葉では、裏切者と言ふのは、信義の欠けた、反逆の、不信不忠の謀反人を意味してゐるのです。我々の國では、それは單に我々イギリスのために全然身を捧げない者を指してゐるのです。

コオシヨン　御免なさい、わたしはそんな事は知らなかつたものですから。（威厳を保ちながら自分の椅子に戻る。）

ウオリク　（ほつと胸を撫で下ろして、自分の椅子に坐りながら）若しわたしがあの哀れな娘の火焙りをあまりに輕々しく考へるやうな態度が見えたとすれば、わたくしとしてもお詫びしなければなりません。戰略の單なる一條件として屡々一地方があますところなく燒拂はれるのを見ますと、誰しも感じが鈍くならざるを得ません。でなければ、氣が狂ふものもあるかも知れない

のです。とにかく、わたしにとつてはさうです。失禮ですが、閣下も亦、多くの異端の徒が屡々火焙りになるのを御覽になるに違ひありませんが、余儀なくさうしてゐられる事と思ひます――職業的立場から見ましても、實に恐るべき事だと思ひますが。

コオシヨン　さうです。苦しい務です。あなたの仰しやるやうに、恐ろしい務でもあるのです。然し、異端の恐ろしさに較べれば何でもありません。わたしは、あの娘の肉體が、ほんの暫くの間苦しんで、結局、多少は苦痛な死方で死なければならないのを考へてゐるのではありません。あの娘の魂が永却の苦しみを受けるのを考へてゐるのです。

ウオリク　仰せの通りです。神よ、あの女の魂を救はれん事を。ところで、實際の問題は、あの女の肉體を救ふことなく如何にしてその魂を救ふべきかにあるやうに思へます。何故なら、若しあの女の禮拜がこの上續くならば、我々には理由がなくなるのに遭遇しなければならないのです。

牧師　（泣いてゐた者の聲のやうに途切れ勝な聲で）話してもいゝでせうか、閣下。

ウオリク　そりや構はないが、ジョン君、氣持の落つくまで口を利かない方がよかないかね。

牧師　ただこれだけ申したいのです。間違つてゐましたら、御訂正して頂きたい。ところで、あの女は僞りで充ちてゐるです。神を信仰してゐるやうな風をしてゐるのです。あの女の祈りも懺悔も綣る時がないのです。あいつが教會の忠實な娘らしく見せかけるのを怠らない以上、どうして異端の罪に問ふ事が出來るでせう。

コオション　（かっとなつて）教會の忠實な娘ですと。法王御自身でさへ、最も偉大な時にだつて、あの女の考へるやうにはお考へにはならないのだ。あの女は、自分自らが教會であるやうな振舞をしてゐる。あの女は、シャルルに神の使を齎らし、教會は側へ押遣られてゐなければならない。あの女はランスの大伽藍でシャルルを位に卽かせるだらう。教會ではなくあの女が！あの女は又、イギリス王に手紙を送つて、あの女を通して神の命令を與へて、イギリス王にして已の島へ歸へらなければ天罰を犯すものにして、あの女がその天罰を執行するものだと申し送るのだ。このやうな手紙を書くのは、あの呪はれたマホメットかキリストの大敵のなす事であると言はなければならない。あの女は一度だつて教會の名を口にした事がありますか。ありはしないのだ。あの女の口にする事と言へば、常に神と已自身なのだ。

ウオリク　何を望む事が出來るのです。あんな馬に乘つた乞食に！　あの女は氣が狂つてゐるのです。

コオション　誰が氣を狂はしたのです。惡魔だ。それには大きな目的があつての事だ。惡魔は到る處へ異端邪道を弘めるのです。三十年前コンスタンスで火焙りにされたフスと言ふ男は、ボヘミヤ中に異端の害を與へたのです。キツクリイフと言ふ名の男は、自ら神に仕へる僧の身でありながら、イギリスへこの害毒を傳播させた。而も、あなた方にとつて恥辱なことにも、その男を寢床で死なせてゐるのです。フランスにも亦、かやうな人間がゐるのです。わたしはそれがどんな風に育つてゆくか知つてゐる。それは癌（がん）のやうなものであつて、切り取るか、踏み躙るか、燒き拂ふかしなければ、停るところなく擴がつて、終には人間社會の全體を、罪と墮落、浪費と破滅へ導くのである。これを力にして、一アラビヤの駱駝飼はクリストとその教會をイエルサレムから追ひ出して、野獸のやうに西へ西へと荒して來て、終には、フランスと天罰の間には僅かにピレニイズ山と神のお惠があるに過ぎないのです。而も、この駱駝飼の男が最初になした事と、あの羊飼の女がなすことと、何處に異るところがあるでせうか。駱駝飼

は、天使ガブリエルからお告をうけ、羊飼は聖キヤサリンや聖マアガリツトや天使ミカエルからお告をうけたのだ。あの男は自らを神の使者であると高言して、神の名に於てこの地上の諸王に書を寄せた。あの女は毎日のやうに、諸王に手紙を送つてゐる。今では我々が和解を求めなければならない相手は、神の母ではなく、ジヨウンなる娘なのである。若し教會の長年の間の智慧や知識や經驗や、學問あり信仰深き僧正達の宗教會議が、無知な勞働者や乳搾りの女のために、犬小屋同然なところへ預けられるしたら、この世界はどうなるでせう。あいつ等は、天から直接に靈感を得たと言ふ不埒な己惚を、惡魔から吹き込まれた奴ではないか。さうなればこの世は血と怒と荒廢の世界になつて、銘々が己の欲のために戰ひ、終には野蠻に歸るあさましい世界になるのた。何故なら、今ではマホメツトとその欺かれた信者、あの娘とその欺かれた信者があるばかりです。若しすべての女が自分をジヨウンと、すべての男が自分をマホメツトと考へるならば、どうなるでせう。わたしはそれを思ふと、骨の骨まで身顫ひするのです。わたしは一生涯それと戰つて來た。そして、最後までそれと戰ふつもりです。あの女のあらゆる罪は許しても、この罪だけは許す事が出來ない。この罪こそ聖靈に抗ふ罪です。ですから、

若しあの女にして、異端の說を公然投げ棄て、魂の隅まで教會に委ねないならば、何時かはわたしの手に捕へられた曉、必ずあの女を火焙りにしてやりませう。

ウオリク　（大した感動を受けずに）あなたがその事を強く感じてゐられるのは、尤もの事です。

コオシヨン　あなたはさうぢやないのですか。

ウオリク　わたしは軍人であつて、僧侶ではありません。あたしは聖地巡禮の際、マホメツト教徒の事はかなり深り知りました。彼等は、わたしがともすれば信じ勝ちであつた程そんなに育ちが惡くはありません。或點では彼等の行（おこなひ）は我々に比較して劣るところがありません。

コオシヨン　（氣持を損れて）それは、わたしは以前から氣付いてゐます。人は異教徒を改宗させるには東邦へゆく。すると異教の徒が却つてそれを邪教へ導くだ。十字軍の兵士は殆んどサラセン人となつて歸つて來るのです。かう言つたからとて、何もイギリス人が異端に生れついてゐると言ふのではありませんよ。

牧師　イギリス人が異端ですと!!（ウオリクに嘆願しながら）閣下、我々はかかる事に我慢しなければならないのですか。僧正は取りのぼせてゐられるのです。イギリス人の信ずる事がどう

して異端外道なものですか。それでは言葉の矛盾です。

コオシヨン　ストガンバア君、どうにもならない無知無盲のせいとして、あなたを咎め立てしますまい。あなたの國の濁つた空氣は、神學者をつくりはしないのです。

ウオリク　我々が宗教について爭論してゐるのを、若しあなたがお聞きになれば、そんな事は仰しやるまい、閣下。マホメットの信者が我々の神を大いに尊敬してゐるのを告白し、聖ピイタアが漁師であるのを許さうとする心は、我々がマホメットの駱駝飼であるのを許さうとする心以上であるのを、わたしが一旅行者として知つてゐるからとて、わたしを異端の徒か、でなければ分らず屋に違ひないとお考へになるのはどうも殘念至極です。然し、我々は迷信は問題にしなくとも、この事件を進めて行く事が出來るのです。

コオシヨン　クリスト教會の目的を迷信と言はれるなら、わたしにはどう考ふべきか分つてゐます。

ウオリク　それは單に東と西の見解の差に過ぎません。

コオシヨン　（苦々しい皮肉な調子で）單に東と西とですと！　單にね!!

ウオリク　いや、大僧正、わたしはあなたの說に反對してゐるのではありません。あなたは敎會を擁護なさるでせうが、貴族の事にも心をお用ゐになるべきです。わたしの考では、あの娘に對しては、あなたが批難なさつた以上に強く批難すべきところがあると思ひます。明らさまに言へば、わたしは、あの娘が新しいマホメットとなつて、力強い異端の敎を敎會に代らしめる事があらうとも、大して恐れはしません。あなたはその危險を誇張してゐられるやうに思ひます。然し、あなたにはお氣がつかないのですか、あの女は手紙の中で、旣にシャルルに強要したやうに、歐洲のすべての王に向つて、キリスト敎國の社會的組織をのこらず破壞するやうな條件を申し送つてゐるではありませんか。

コオシヨン　敎會を破壞するのです。さう言つてるぢやありませんか。

ウオリク　（とうとう我慢がし切れなくなつて）閣下、後生です、暫く敎會と言ふ考を離れて、精神界同樣この現世にも現世の制度があるのを思ひ出して頂きたい。あなたが敎會を代表なさるやうに、わたしやわたし達貴族は封建制度の貴族政體（アリストクラスィ）を代表してゐるのです。我々は現世の力です。それなのに、あの娘の考が我々の心にどんな打擊を與へたかお分りにならないのですか。

コオション　一體あの娘の考があなたの心にどんな打撃を與へたのです。教會のために、我々凡ての者が考へたと同じではないのですか。

ウオリク　あの娘の考では、王はその領土を神に返して、神の代官として國を治むべきだと言ふのです。

コオション　（少しも興味を感じないで）それこそ立派に神學にかなふものです。然し、王は、統治權さへ貰へれば、どちらだつて何とも言ひやしないのだ。それは抽象的な考で、言葉の單なる形式です。

ウオリク　そんな事はありません。それはアリストクライを破壞して、王に絶對の獨裁權を許す狡猾な策です。王が單に貴族の中で最も位高い者に過ぎなかつたのが、貴族の支配者になるのだ。我々はそんな事を耐へ忍ぶ事が出來ない。我々は何人をも主人と呼びやしない。我々が王から領土や權威を得てゐるが、それは人間社會と言ふ建物には、要石が要るためであつて、名儀上のものに過ぎない。我々は自分の領土は自分の手で得て、我々の劍や家來の劍を以てそれを護つてゐるのだ。ところが、あの娘の敎に從へば、王が我々の領土を有つ事になるのだ。

我々の領土を！――そして、それを神に捧物にするのだ。それから、改めて神がそれをのこらず王だけに下さるのだ。

コオション　あなたはそれを恐れる必要があるでせうか。結局は、あなた方が王をつくる事になるのです。イギリスのヨオクやランカスタア、フランスのランカスタアやヴアロオア、それ等はあなた方の氣に入るやうに國を治めるのです。

ウオクリ　それはさうです。然し、それは、たゞ人民が封建制度の諸侯に服從して、王樣をば旅の見世物として知つてゐる間に限るのです――萬人共通の所有である大道だけが我物である旅の見世物としてね。若し人民の考や心持が王に傾いて、諸侯である貴族が單に王の召使として人民の眼に映ずるやうになれば、王は我々諸侯を一人一人膝の前へひれ伏さす事が出來るのだ。さうなれば、我々は宮廷にゐる揃の服を著た廷臣達と何の異なるところがあらうか。

コウション　さうなつても、恐れるには及びませんよ、閣下。或者は王に生れ、或者は政治家に生れる。然し、兩者を兼ねた者は滅多にないのです。王は自分のために政策を立てそれを遂行してくれる顧問官を何處に求めるのですか。

ウオリク　（大して親しげには見えない微笑を浮べて）多分教會に求めるでせう、閣下。

コオション　（同じやうに不愛想な微笑を浮べて、眉を聳やかし、彼に反對しない）

ウオリク　男爵達を滅したら、大僧正達はすつかり自分勝手にする事でせう。

コオション　（妥協的に、今迄の論戰的な調子を落して）ところで閣下、わたし達はお互に啀み合つてゐる以上、あの娘を打負すことは出來ないのです。わたしは、この世には權力に對する意志のあるのをよく知つてゐます。その意志が續く限りは、帝王と法王、公爵と政治的な大僧正、男爵と諸王の間には、爭鬪が絶えはしないのです。惡魔はわたし達の間を引裂いて、支配するのです。あなたは教會には一人のお友達もない事と思ひます。あなたは初めから終まで伯爵です、わたしが初めから終りまで僧でゐるのと同じです。然し、わたし達は共同の敵に向つて、お互の差別を撤回する事が出來ないものでせうか。ところで、あなたが心に考へてゐられる事は、あの娘が教會の事を一度も口にしないで、ただ神と自分のことだけを考へてゐると言ふ事ではなく、貴族の事を一度も口にしないで、ただ王と自分のことだけを考へてゐると言ふ事でせう。

ウオリク　その通りです。あの女に對するこの二つの考は、根底に於ては同じものなのです。その根は深く入りこんでゐるのです。それは、普通の個人と神と○間に、僧侶や貴族の介在するのを認めない個人の抗議です。わたしは强ひて名付けるなら、それをプロテスタンテイズムと呼びたいのです。

コオション　（嚴しく彼を見ながら）實によく了解してゐられますね、閣下。一つ、イギリス人を探し求めて、プロテスタントをお見つけになつては。

ウオリク　（この上なく鄭重なふりをしながら）閣下はあの娘の現世の異端に對してまだ少なからぬ同情を抱いてゐられるやうに思ひます。適當な名前はあなたにお委せ致しませう。

コオション　あなたは誤解してゐられる。わたしは、あの女の政治上の潛越さには何等の同情も有つてはゐません。然し、一僧侶として、わたしは普通一般の人間の心を知つてゐます。そこには別のもつと恐ろしい考のあるのが、今にあなたもお分りになるでせう。わたしはその考を、フランス人に對するフランス、イギリス人に對するイギリス、イタリイ人に對するイタリイ、スペイン人に對するスペインなどと言ふ言葉で言ひ現はす事が出來るばかりです。それは、

田舍の人にとつては、屢々狹く苦々しい考である事が多いのに、驚いた事には、あの田舍娘は自分の村民に對する村と言ふ考以上の考を有つてゐる事です。あの女にはそれが出來るのです。又、さうしてゐるのです。若しあの女が、フランスの土地からイギリス人を威丈高になつて追ひ拂ふならば、あの女は疑もなくフランス語を話してゐる國を殘る隈なく考へてゐるのである。あの女にとつては、フランス語を話す人民は、神聖な聖書に書かれてある國民のことなのだ。あの女の異端のこの方面を、國家主義（ナショナリズム）と呼んでもいいかと思ひます。わたしは他に適當な名前を思ひつく事が出來ません。わたしはただ、それは本質からみて、カソリックの敵でありキリスト教徒の敵であると言ふ事が出來るばかりです。何故なら、カソリック教會にはただ一つの領土があるばかりで、それはクリスト教の王國である。その王國をば多くの國民に分つならば、あなたはクリストを廢するのです。若しクリストを廢するならば、誰が我々の生命と劍との間に立つて防いでくれるでせうか。この世は戰亂のうちに滅びるでせう。

ウオリク　では、あなたがプロテスタントを火焙りになさるならば、わたしは國家主義者を火焙りにしませう。多分、ジョン君はわたしには不贊成だらう思ひますが、イギリス人のためにイギリス、と言ふ考はジョン君には氣に入るでせうから。

牧師　全く、イギリス人のためにイギリスと言ふ考は、言ふまでもない事です。それは自然の明かな法則です。然し、イギリスが正當に占領した土地は、その土地のためをはかつて未開の種族を支配するのにイギリスが特に適當してゐると言ふので、神樣がお與へになつたのに、あの女はそれを認めないのです。わたしには、あなた方がプロテスタントとか國家主義者とか仰しやる意味が分りません。あなた方は、わたくし如き牧師よりは、學問も深く、聰明な方でゐられます。然し、わたしは極く常識的なこととして、あの女は反逆者だと思ひます。わたしにとつてはそれで十分です。あの女は、男の服裝をして、戰爭する事によつて、自然に逆くのです。法王の神聖な權威を奪つて教會に逆くのです。魔王（セイタン）と忌々しい同盟を結んで、魔王の邪惡な靈を我軍に手向はせて、神に逆くのです。そして、此等の反逆は凡て、我軍に抗ふ大きい反逆の口實に過ぎないのです。かゝる事には、この上我慢すべきではありません。あの女を滅せ。あの女を燒き殺せ。あの女をして全信者に害を與へさせてはならない。一人の女が多くの人のために死ぬのは當然のことです。

ウオリク　（立上つて）閣下、我々は意見が一致したやうに思へますが。

コオション　（同じく立上つて、然し抗議して）わたしは自分の魂を危ぶくしたくはありません。わたしは教會の正義を樹立しませう。わたしはあの女を救ふために全力を上げて努力します。

ウオリク　あの哀れな娘を氣の毒に思ひます。わたしはこんなに嚴格になるのが嫌ひです。わたしは出來るだけその女を助けませう。

牧師　（執念深く）あたしは、この手であの女を燒殺してやらう。

コオション　（彼を祝福しながら）Sancta simplicitas！

第五場

ランスの大伽藍の、禮拜堂の戸口近くの歩廊。柱が一本あつて、ステエションズ・オブ・ザ・クロオスの一つを現はしてゐる。戴冠式が濟んで、人々が本堂から立去るのにつれて、オルガンが奏せられてゐる。ジョウンはステエションの前に跪いてお祈りしてゐる。彼女は美しく著飾つてゐるが、依然として男の身裝である。オルガンの音が歇んで、これも同じく立派に著飾つたデュノアが、法衣室（ウエストリイ）から歩廊へさはひつて來る。

デュノア　さあ、ジョウン、お祈りはもう澤山ぢやないか。あんなに烈しく泣いた後で、この上此處にゐると風邪をひくよ。もうすつかり式は濟んだのだ。伽藍はからだ。往來は人で一杯になつてゐる。群集は、娘、娘つて呼んでゐる。君は此處でたつた一人でお祈してゐると言つておいたが、みんなはもう一度君を見たがつてゐるのだ。

ジョウン　いゝえ、名譽はすつかり王様にあげなくちやいけないわ。

デュノア　王様ぢや折角の見世物を臺なしにするだけだ、あの貧弱な奴ぢや。いゝや、ジョウン、君が王様を卽位させたのだ。だから、その後仕末も君がやらなくちやならない。

ジョウン　（不興さうに頭を振る。）

デュノア　（彼女を起し引ながら）さあ、さあ！　二時間もすれば濟む事だ。この方が、オルレアンの橋よりはいゝぢやないか、えゝ。

ジョウン　まあ、デュノア、もう一度オルレアンの橋だつたら、どんなにいゝだらうね。あたし達は、あの橋では生きてゐたのよ。

デュノア　さうだ、全くだ。それに死んだものもあるんだ、我々のうちの幾人かは。

ジョウン　變ぢやないの、ジャック。あたしはそりや臆病者よ。戰爭が始まるとなると、何とも言へない位びく〳〵してゐるのよ。だけれど、その後でもう危險がなくなつてしまふと、そりや退屈なのよ。あゝ、退屈だ！　退屈だ！　退屈だわ！

デュノア　戰爭も、飲食と同樣、あんまり遣り過ぎないやうにしなくちやいけないんだよ。

ジョウン　ねえ、ジャック。兵隊が戰友を愛するやうに、あんたもあたしを愛してくれるだらうね。」

デュノア　可哀さうに、君は清淨無垢な神の子だから、さう言ふ愛に飢えてゐるんだ。君は宮廷にはあんまり友達がないからなあ。

ジョウン　何故、あの廷臣や騎士や僧さん達は、みんな寄つてたかつてあたしを憎むんでせう。あたし、あの人達に何をしたと言ふの。あたしは自分のためを圖るやうな事は何一つ賴みやしなかつたのに。ただあたしの村が戰時稅を拂へないので、それを免除して貰つただけだわ。あたしは、あの人達を好運にし、勝利を與へてやつた。あの人達がいろんな馬鹿げた眞似をしてゐる時に、それを直してやつた。あたしはシャルルを位につけて、ほんとうの王樣にしてあげた。そして、王樣の授けて下さる名譽はのこらずあの人達のものになつた。それなのに、何故あの人達はあたしを愛してはくれないの。

デュノア　（彼女をひやかしながら）馬鹿だなあ！　君は他人の馬鹿なのをひやかしておきながら、それで他人に可愛がつて貰ふつもりなのかい。退職から召集されて來た、へまばかりやる老ぼれの將校連が、自分達に取つて替る出來榮のいゝ青年士官を可愛がるもんか。野心のある政治家が、內閣の席を奪ふ新進の士を愛するもんか。大僧正連が、たとへ相手が聖者でも、祭

壇から追ひ除けられるのを悅ぶもんか。僕だつて野心の强い男だつたら、君を嫉妬してゐたに違ひないぜ。

ジョウン　あんたは此處では珍しく立派な人ね、ジャック。大勢の貴族の中で、あたしのたつた一人のお友達だわ。屹度あんたのお母さんは田舍生れだと思ふわ。あたしパリイを占領したら、農場へ歸るつもりだわ。

デュノア　さう安々とパリイを取らせてくれないぜ。

ジョウン　（吃驚して）何ですつて！

デュノア　あの連中がみんな、それについて正しい考を有つてゐりや、僕がとつくの昔に占領してゐるところだよ。あいつ等のうちには、却つて君がパリイに取つつかまれるのを望んでゐる奴もゐるんだ。だから、氣をつけ給へ。

ジョウン　ジャック、この世はあたしにはあんまり辛過ぎるわ。ゴッダムやバアガンディ人があたしを殺さないなら、フランス人が殺すわ。あたし、神樣のお告げになる事を聞いてゐる時だけ、心がうつとりするのよ。だから、あたし戴冠式のあとで、こつそりと逃げ出して、一人

ぽつちで此處でお祈せずにはゐられなかつたの。あたし、面白い事を話してあげるわ、ジヤツク。あたし、鐘の音の中にあたしの聲を聞いたのよ。鐘がのこらず鳴つてゐた今日ぢやないわ。あれはぢやん〳〵言ふだけだわ。でも、鐘が天から下りて來て、反響(こだま)の音がいつまでも漂ふこの隅つこや、又は、田舍の靜かさを破つて遠くから鐘の音の響いてくる野原で、あたしは鐘の音のうちにあたしの聲を聞くのよ。(伽藍の時計が四分の一時間を打つ)ほら、お聽きなさい！(彼女は有頂天になる)聞こえて？ ほらね、あんたの仰しやつたやうに、「いとしき神の子よ」つて言つてるわ。半時間の時には、「勇ましく進め」つて言ふの。四分の三時間には、「われ、汝の助けなり」つて言ふのよ。でも、一時間のときには、あの大鐘も一しよに「神はフランスを救はん」つて響いて、それから、聖キヤサリン樣や聖マアガリツト樣が、時々はミカエル樣も、あたし前にはどうしても分らなかつた事をお話して下さるの。それから、それから、それからね——

デユノア (彼女を優しく遮り、然し、同情に充ちた樣子ではなく)それから、ジヨウン、僕達は自分の想像する事を何でも、鐘の音の唸りの中に聞くんだよ。君はその聲の話をすると、どうも僕は不安になつてならない。若し君のする事に筋道の立つた理由のあるのを、僕に見せてくれ

なかつたら、僕は君を少し氣がふれてゐると思つたかも知れないよ。君が聖キヤサリンの言ひつけに從つてゐるだけだと、他人に話してゐるのを、僕は聞くには聞いてゐたんだが。

ジヨウン (機嫌を惡くして)だつて、あんたがあたしの聞いた聲を信じないから、あんたのために理由を見つけなくちやならなかつたんだわ。でも、聲が最初に聞えて、それから理由が見つかるのよ。あんたがほんとうにしようとしまいと、どうだつて構ひやしないわ。

デユノア 怒つたのかい、ジヨウン。

ジヨウン さうよ。(微笑しながら)いいえ、あんたの事を怒つたんぢやないわ。あたし、あんたが村の赤ん坊の一人だつたらと思ふわ。

デユノア 何故。

ジヨウン あんたを暫く育てる事が出來るからよ。

デユノア 君にもやつぱり女らしいところがあるんだね。

ジヨウン いいえ、ちつともありやしないわ。あたしは軍人であるだけよ。軍人は、子供を育てるやうな場合に出會へば、何時でも育てるものよ。

デユノア　そりやさうだなあ。（笑ふ）

王シャルルは、法衣室で即位式の著物を脫いで、そこからはひつて來る。左手には靑髯、右手にはラ・ヒイル。ジョウンは柱の影へこそこそと姿を隱す。デユノアはシャルルとラ・ヒイルの間に殘る。

デユノア　ところで、陛下もとうと塗油式をすまして眞の王樣になられましたね。如何です、お氣に召しますか。

シャルル　今度は太陽と月の王樣にすると言はれたつて、もう二度とこんな目に會ひたくはないよ。あの衣裳の重い事つたら！　僕は冠を頭に戴せられた時には、あぶなくぶつ倒れるかと思つたよ。それに、兼々話に聞いてゐたあの有名な聖油なんて、腐つた匂がするぢやないか、ぷう！　大僧正は、屹度半死半生の體に違ひない。あいつの衣裳つたら、一噸位の重さはたしかにあるね。まだ衣裳部屋（ヴェストリイ）で著物を脫がして貰つてゐるよ。

デユノア　（不愛想に）殿下は、もつと度々鎧をお召しになるべきです。さうすれば、重い著物にはお馴れになりますよ。

シャルル　そりやさうさ。そんなやじり方ぢや古いよ。僕は鎧なんか著る氣はない。戰爭なんて僕の柄ぢやないんだ。娘は何處にゐる？

ジョウン　（シャルルと靑髯の間に進み出て、跪きながら）陛下、あたしはあなたを王樣にしました。あたしの仕事は濟んだのです。あたし、父の農場へ歸ります。

シャルル　（驚いて、然しほつさして）ええ、ほんとう？　さうだね、それもいいだらう。

ジョウン　（立上り、深く男氣が挫ける）！

シャルル　（心に留めない樣子で話を續ける）それは體のためにはいい生活だよ。

ジョウン　でも、退屈な生活ですわ。

靑髯　君は隨分長い間ペチコオトをつけなかつたんだから、今度はそいつに足を取られて轉ぶだらうよ。

ラ・ヒイル　君は戰爭がなくなると寂しくなるぜ。そいつあ、惡い習慣だが、根強い習慣で、どんなにしても直す事の出來ない習慣だよ。

シャルル　（心配さうに）だが、君がほんとうに家へかへる氣なら、僕達は無理に引留めやしないよ。

ジョウン　（苦々しく）あなた方はあたしが歸るのを見ても悲しいと思つて下さらないのは、よく分つてゐるわ。（彼女はシャルルに背を向けて、その傍を通過ぎて、自分と氣の合ふデュノアやラ・ヒイルのゐるところへ行く）

ラ・ヒイル　そりや、わしだつてしようと思へば惡口を言ふ事も出來るさ。だが、君がゐなくなると、時々は寂しいと思ふだらう。

ジョウン　ラ・ヒイル、あんたがどんなに罪を犯さうと惡口を言はうと、あたし達は天國で會ふでせう。だつて、あたしは、うちの羊の番をしてゐる年とつた犬のピッウを愛するやうに、あんたを愛してゐるんだもの。ピッウは狼を殺したのよ。あんたもイギリスの娘どもが國へ歸らないうちは、あいつ等を殺して、神樣に仕へる立派な犬になるでせう。さうぢやないの。

ラ・ヒイル　君もわしも一しよになあ。さうだとも。

ジョウン　いいえ、あたしは事を始めてから、ほんの一年の間ゐるだけよ。

一同　何だつて！

ジョウン　とにかく、あたしには分つてゐるわ。

デュノア　馬鹿な！

ジョウン　ジャック、あんたはあいつ等を追ひ出すことが出來ると思つて？

デュノア　（落着きのある確信を以て）さうとも、僕は追ひ出してやるよ。あいつ等が我々を打負かしたのは、我々が戰爭を馬上仕合や身の代金の市場だと思つてゐたからだ。ゴッダムが戰爭を眞面目に考へてゐるのに、僕達は馬鹿な眞似をしてゐたからだ。然し、僕は教訓も得たし奴等の遣り方も分つたのだ。あいつ等はこのフランスには根をはる事は出來やしない。僕は奴等を以前に打破つた事がある。もう一度打破つてやらう。

ジョウン　でも、あいつ等に殘酷なことはしないでせうね、ジャック。

デュノア　ゴッダムの奴は、優しい遣り方では屈服しないのた。僕は初めからそんな事はしなかつた。

ジョウン　（突然）ジャック、あたしがうちへ歸る前に、あたし達でパリィを占領しよう。

シャルル　（恐れをなして）いや、いけない、いけない。そんな事をしたら、僕達が折角手に入れたものを殘らず失ふことになるだらう。もう戰爭はよさうぢやないか、我々は、バアガンデ

イ公と非常にいゝ條約を締結する事が出來るのだよ。

ジョウン　條約ですつて！（我慢がならないで足踏みする）

シャルル　だつて、何故いけないんだい、僕は戴冠式もすませたし、頭に聖油も塗つたのに。

あゝ、あの油つたら！

大僧正が法衣室からはひつて來て、シャルルと青髯の間に加はる。

シャルル　大僧正、娘が又、戰爭を始めたいんだつて。

大僧正　では、戰爭が濟んだのではないのか。我々は平和になつたのではないのか。

シャルル　いゝや。僕の考では、さうぢやないやうだ。然し、僕達は、もうこれ位で滿足しようぢやないか。條約を結ばう。僕達の好運はあんまり良過ぎて、長續きしさうもないよ。だから、そいつが逆轉しないうちに止めておくには今がいゝ時機だ。

ジョウン　好運ですつて！　神樣があたし達の味方をして戰つて下さつたのです。それなのにあんたはそれを好運つて言ふのですか。このフランスの神聖な土地に、まだイギリス兵がゐるのに、あんたはもう戰爭を止さうと言ふんですか。

大僧正　（嚴格に）これ娘、王はわたしに話してゐられるのであつて、お前ではない。お前は己を忘れてゐる。お前は屢々己れを忘れるのだ。

ジョウン　（顏を赤らめる事なく、寧ろ粗野に）では、話して下さい、あんたが。そして、王樣が土地のことを顧みないのは神樣の思召ではないと、王樣にさう言つて下さい。

大僧正　わたしがお前のやうに神の名をみだりに口にしないのは、敎會とわたしの神聖な職務との權威を以て、神の意志を解釋してゐるからだ。お前は初めて來た時には、それを尊敬してゐて、今のやうな大膽な口の利きやうはしなかつたのだ。お前は謙讓の德で身を飾つて來た。そのために、神樣がお前の企を祝福して下さつたからとて、お前は傲慢の罪で自分を汚したのだぞ。古い希臘の悲劇が我々の間に起るのだ。それは傲慢の懲(こらしめ)なのだ。

シャルル　さうだ、この女は自分が他の誰よりものが分つてゐると思つてゐるのだ。

ジョウン　（困つたやうに、然し、純眞なので自分のなしてゐる事が他人にどんな結果を與へたか見る事が出來ないで）でも、あたし、ほんとうにあなた方の誰よりもよく知つてゐるわ。それに、あたし傲慢ぢやないわ。あたしは自分が正しいといふ事が分らないうちは、決して喋りやしないわ。

青髯。シャルル　（同時に叫ぶ）はつはつ！　その通りだ。

大僧正　お前は、自分の正しいといふ事がどうして分るのだ。

ジョウン　あたし何時でも分つてゐるわ。あたしの聞く聲が――

シャルル　あゝ、君の聲、君の聲。何故その聲が僕に聞えないんだらう。王様は僕で、君ぢやないんだよ。

ジョウン　その聲はあんたのところへ遣つて來るが、あんたには聞えないのです、あんたは、夕方野原に坐つて、その聲に耳を傾けた事がないのよ。御告の鐘（アンゼラス）が鳴ると、あんたは十字を切つて、それで濟ましてしまふんだわ。でも、あんたが心からお祈して、鐘が鳴りやんだ後も、空中に顫える鐘の餘韻に耳を澄すなら、あたしと同じやうに聲が聞えるでせう。（彼から粗暴に身をそらして）でも、あんたにはどんな聲が入用でせうか、鍛冶屋が、鐵は熱いうちに打たなければならないと言ふやうな、そんな分り切つた事を話すのに。申上げておきますが、あたし達はコンピエヌを襲撃して、オルレアンを救つたやうに救はなくちやならないのです。さうすれば、パリイはその入口が開けるのよ。若し、それが駄目なら、あたし達は入口を突破りませう。首府を有たなくちや、あんたの冠に何の値打があるのです。

ラ・ヒイル　わしもさう言ひたいのだ。我々はバタ一斤を貫く眞赤に燒けた彈丸のやうに、突き破らう。どうだ、君は何か言はないのかい、私生兒。

デュノア　もし我々の大砲の彈（たま）が、一つのこらず君の頭のやうに熱くなつてゐて、それをどつさり有つてゐたら、我々は地上を征服するだらうよ、疑なくね。膽力と性急（せつかち）とは、戰爭ぢやいゝ召使だが、惡い主人だよ。そいつに身を委せるといつでも、そいつは我々をイギリス軍の手に渡してゐるのだ。僕達は、何時自分達が負けるか知らないのだ。それが我々の大きな缺點だよ。

ジョウン　あんたは、何時自分達が勝つか知らないのよ。それはもつと惡い缺點だわ。あたし、イギリス兵があんた方をすつかり遣り込めてゐないのを、あんたにはつきり信じさせるために、戰場へ望遠鏡を持たせて上げなくちやいけないわ。若しあたしがあんたに攻撃するやうにさせなかつたら、あんたは今でもオルレアンで包圍されてゐるでせうよ、あんたやあんたの參謀會議はね。あんたは何時でも攻擊しなくちやいけないわ。そして、何時までもそれを續けてゐさ

へすれば、敵の方が參つてしまふのよ。あんたには、戰爭つてどうして始めるものか分つてゐないんだ。大砲の用ゐ方も分つてゐないんだわ。でも、あたしには分つてゐるわ。

膨つ面をしながら、平石の上へあぐらをかいて坐る。

デュノア　君は僕達のことをどう考へてゐるか、僕には分つてゐるよ、ジョウン將軍。

ジョウン　遠慮しないでいゝわ、ジャック。あんながあたしの事をどう思つてゐるか、みんなにお話なさいよ。

デュノア　僕は、神樣が、君の味方をして下さつたのだと思つてゐる。君が來たので、風向が變つて、我軍の意氣も變つたのを、僕はちやんと憶えてゐるからね。誓つて言ふが、我軍が勝利を得たのは君の指圖に從つたためだと言ふのは決して否定しないよ。然し、僕は一軍人として言ふが、神樣は每日男に仕へる奴隷でもなく、女に仕へる奴隷でもないのだ。若し君にそんな値打があるなら、神樣は時には君を死の窮地から救つて、勝戰（かちいくさ）に導いて下さる事もあるだらう。然し、それ切りのことだぜ。君がもう一度勝たうとするには、君の全力全才能を以て戰はなきやならないのだ。何故なら、神樣は君の敵に對しても公明正大であるに違ひないからなあ。

それを忘れるなよ。成程、神樣はオルレアンでは君に力をかして、我軍に勝を持たせて下さつて、その勝利が我軍を更に幾度かの勝戰に導き、終に此處で即位式を擧げるまでに漕ぎつけたのだ。然し、我々が更にその好意に甘へて、我々自身でしなければならない仕事を、神樣にして頂かうとするなら、我々は敗北するに違ひないよ。さうなるのが當然なんだ。

ジョウン　でも——

デュノア　しいつ！　僕の話はまだお終ひぢやない。あんた方は誰でも、今度の我々の勝利は指揮官がなくとも得られたものだと思つてはならないのです。シャルル陛下、あなたは御聲明の際に今度の戰役に於けるわたしの事は一言も仰しやいませんでした。わたしはそれを不平に思つてゐるのではありません。人民は娘とその奇蹟は大いに持て囃しはするが、この私生兒（バスタアド）が娘のために軍隊を集め、軍隊に糧食をあてがふのにどんなに骨を折つたか顧みてはくれないのですから。然し、神樣が如何ばかり娘に力をかして我々の味方をして下さつたか、そして、如何ばかり神樣が僕自身の知力を盡してなすべき事を僕に殘して下さつたか、僕はよく知つてゐる。だから、君に言つておくが、君の奇蹟の暫くの時は過ぎたのだ、これからは戰爭ごつこを

一番よくやつたものが勝つのだ——若し好運が味方をすれば。

ジョウン　ほらね。もし、もし、もし、もし、もしもだわ！　もしも、それからもしもしもが、壺や鍋になるものなら、鑄掛屋が要りやしないわ。（急き込んで立上つて）私生兒さん、あんたのやうな戰爭の遣り方では、何にもなりやしないわ。だつて、あんたの騎士達はほんとうの戰爭には役に立ちやしないんだもの。あの人達にとつちや、戰爭はほんの勝負事に過ぎないのよ、テニスだとか、他のいろんな遊戲のやうにね。あの人達と來ちや、何が正當で、何が不正か規則をこさへて、自分や馬の上に鎧をつみかさねて、矢に當らないやうにしてゐるんだわ。そして、倒れたが最後起上ることが出來ないで、家來が遣つて來て、起上らせてくれて、自分を馬から突落した人間と身の代金を取りきめるのを待つてゐるのよ。そんな事はすつかり過去つてしまつて、もうお終ひになつたのが、あんたには分らないの。火藥があるのに、鎧なんて何の役に立つもんか。もしさうだとすれば、あんたの騎士の半分は身の代金で生活してゐるんだけれど、フランスや神様のために戰つてゐる人人は、そんな身の代金の取引をするために足を留めるとでも、あんたは思ふんですか。どうしてどうして、あの人達は勝つ迄戰ふでせう。あた

しと同じやうに、戰爭に出る前には、自分の手から神様の手へと命をお委せするのよ。普通一般の人民には、この事がよく分つてゐる。人民は鎧もなければ、身の代金を拂ふ事も出來やしない。でも、殆んど裸の儘であたしの後に續いて、濠へ飛びこみ、梯子を登り、塀を乘り起すんだわ。人民と命を共にするのは、あたしかあなたよ。そして、神様は正しいものを護つて下さるのだわ！　あんたは頭を振るかも知れないわ、ジャック。それから、青髯は山羊髯をひねつて、あたしの眼の前へ鼻を突き出すかも知れないわ。でも、あんなの騎士や將校達が、オルレアンであたしの後に續いてイギリス軍を攻擊するのを否んでゐた日には、どうなつてゐるか考へて御覽よ。あんた方は、あたしを閉ぢ込めておかうと、門をしつかり鎖してゐたのよ。ところが、町の人々や一般の人民が、あたしのあとに續いて、門を押し破つて、本氣に戰爭するにはどうするのか、あんた方に見せてやつたんぢやないか。

青髯　（機嫌を惡くして）法王ジョウンになるばかりぢや滿足しないで、君はシイザアやアレキサンダアにもなりたいんだな。

大僧正　傲慢は何時かは滅びるもんだよ、ジョウン。

ジョウン　まあ、傲慢だらうがなからうがどうだつていゝぢやないか。これはほんとうぢやないの？　常識ぢやないの？

ラ・ヒイル　それはほんとうだよ。我々の半分は、綺麗な鼻を切られるのを恐れてゐるんだ。後の半分は、抵當の金を拂ふために戰場に出てゐるんだ。まあ、この娘の思ひ通りにさせてやれよ、デュノア。この娘は何でも知つてるつて譯にはゆかないだらうが、すべてのものゝ間違のないところを掴んでゐるんだ。戰爭も昔とは變つて來てゐる。戰爭のことをまるで知らない者が、却つてとんでもない味な事をよく仕出かすのさ。

デュノア　そんな事はすつかり僕には分つてゐる。僕は舊式な遣方で戰爭しやしない。僕は、アゼンクウルで、ポアチエやクレシイで大いに學ぶところがあつたのだ。僕はどんな行動をとつても、その度毎にどんなに多くの生命が犠牲になるか知つてゐる。そして、若し犠牲を拂ふだけの値打のある行動だつたら、僕はそれをやり通して、犠牲の償(つぐなひ)はするよ。ところが、ジョウンと來ちや、犠牲がどうだらうがこうだらうが一向お構ひなしで、自分が先頭に立つて、神様に委せ切つてゐるんだ。まるで神様が自分のポケットにはひつてゐるやうな氣でゐるんだ。

ジョウンも、今日までのところでは、大勢の兵隊を味方につけて、戰爭には勝つたさ。然し、僕にはジョウンが分つてゐる。何時かは、百人の仕事をするのに僅か十人の兵隊を引連れて、先頭に立つ事があるだらう。さうなると、神様は多勢の軍隊にお味方になるのが分るだらう。ジョウンは敵のために捕虜になる。ジョウンを捕縛した好運な男は、ウアリク（ウオリクのフランス讀み）伯爵から一萬六千磅貰ふだらう。

ジョウン　（少し得意になつて）一萬六千磅！　まあ、イギリス軍はあたしのためにそんなお金を申し出たの。そんな澤山なお金はこの世にありやしないわ。

デュノア　あるさ、イギリスには。ところで皆さん、話して下さい、若しジョウンがイギリス軍の捕虜になつたら、ジョウンを救ふために指一本でも動かさうつて人がありますか。僕は先づ話してみるよ、軍隊にね。だが、そいつあ後の祭さ。ゴッダムかバアガンデイ人の一人がジョウンを馬から引き摺り下ろす、相手はちつとも打ち殺されはしない。それから、ジョウンは地下の牢獄へぶち込まれる、錠や門は聖ピイタの天使が手を觸れても開きやしない。それから、敵は、ジョウンは僕と同じやうに弱點だらけで、ちつとも恐れるに足りないのを發見する。さ

うなつた日には、我々にとつちやジョウンは一兵卒の命だけの値打もなくなるんだ。そして、僕は戰友としてジョウンを愛する氣持は大いにあるが、危險を冒してまでそんな命を救ひたくはないよ。

ジョウン　あたし、あんたを非難しやしないわ、ジャック。あんたの言ふ通りだわ。若し神樣があたしが敗北してもうつちやつてお置きになれば、あたしは兵隊一人の命だけの値打もないのよ。でも、神樣があたしの手を借りてフランスのためになさつた事を考へれば、フランスはあたしを身の代金だけの値打はあると思つていいわ。

シャルル　君に言つておくが、僕にはお金がないんだよ。それに、この戴冠式で、それもみんな君のせいだが、こいつで折角借りた金を鐚一文殘さず使つてしまつた。

ジョウン　教會はあんたよりはお金持だわ。あたし、教會を信用するわ。

大僧正　これこれ、みんなはお前を往來中引摺り廻して、魔法使として燒殺するだらう。

ジョウン　（彼の方へ走寄つて）まあ、お上人樣、そんな事を仰しやらないで。そんな事があるもんですか。あたしが魔法使だなんて！

大僧正　ペテル・コオションが自分のなすべき役目を知つてゐるよ。巴里の大學では、お前のなした事は立派な行で、神樣の思召に依るものだと言つたために、或女が燒殺されてゐるのだ。

ジョウン　（當惑して）でも、何故ですの。それにはどんな意味があるの。あたしの遣つた事は神樣の思召によるのだわ。それなのに、ほんとうの事を言つたからつて、誰もその女を燒殺すことは出來やしないわ。

大僧正　ところが、燒殺したのだ。

ジョウン　でも、あんたにはその女がほんとうの事を言つたのが分つてゐますわね。あんたは、みんながあたしを燒殺すのを默つて見ていらつしやりはしないでせう。

大僧正　どうしてわたしがそれをとめる事が出來るもんか。

ジョウン　あんたは教會の御名に於て話していらつしやるんでせう。あんたは教會の立派な皇子樣だわ。あたし、何處へ行かうと、あんたの祝福で身を護るわ。

大僧正　お前が傲慢で、柔順にならない以上は、わたしは祝福を與へはしないだ。

ジョウン　まあ、何故あんたは何時までもそんな事を言つていらつしやるの。あたし傲慢でも

なければ、柔順でないなんつて事もないわ。あたしは詰らない娘で、それに無知無學で、いろはのいの字も知りやしないの。どうしてあたしが傲慢になれるもんですか。あたしの聲は神樣のところから來るので、何時でもそれに從つてゐるのに、どうしてあたしを柔順でないなんて仰しやるの。

大僧正　この世の神樣の聲は、地上教會の聲だ。お前が耳にすると言ふ聲はのこらず、お前の氣儘が生み出す反響なのだ。

ジョウン　それはほんとうぢやないわ。

大僧正　（かつと赤くなつて）大僧正の大伽藍で、大僧正が噓をついてゐると言ふのか。その上、お前は、傲慢でもなく不柔順でもないと言ふのか。

ジョウン　あたし、あんたが噓をついていらつしやると言ひやしないわ。あたしの聞く聲が噓だと言はんばかりの事を仰しやるのは、そりやあんただわ。その聲が何時噓なことがあつて？　よしんばあたしの考から生れた反響に過ぎないにしたつて、その聲が何時だつて正しくないことがあつて？　そして、あんたのこの世の御意見は何時だつて間違つてゐるぢやないの？

大僧正　（憤然として）お前を戒めたつて、時間が無駄になるばかりだ。

シャルル　何時だつて、結局はかうさ。この女の言ふのが尤もで、他の者はみんな間違つてゐるのさ。

大僧正　お前に與へる最後の警告として、これだけ言つて置く。若しお前が、精神の指導者達の指圖をないがしろにして、自分勝手な判斷をなしたために身を滅すにしても、教會はお前と緣を切つて、お前が僭越さのためにどんな運命を招かうとも、うつちやつておくがいいか。私生兒がお前に言つたやうに、お前は、指揮官達の戰議をないがしろにして、强情に自分の軍事上の自惚を言ひ張つて。

デュノア　（口を挾んで）それを思ひ通りに行はうとするなら、若し、君が、オルレアンの時のやうな大勢の軍隊を從へてゐないのに、コンピエヌの守備兵を救はうと企てるなら――

大僧正　軍隊はお前を拒絶して、お前を助けはしないだらう。それに王陛下も、位に卽いてもお前の身の代金を拂ふ資力がないと、仰しやつてゐるぢやないか。

シャルル　一文もないよ。

大僧正　お前は一人で立つてゐるのだ。全くの孤立無縁だ。而も、お前は、自分の自惚、自分の無知、自分の强情な僭越、自分の不敬神な事に身を委せながら、神を信じると見せかけて、その罪をのこらず掩ひ隱してゐるのだ。お前が日中にここの戸口を通ると、群集はお前を喝采しもするだらう。あいつ等は、病をなほして貰ひに、幼ない子供や病人を連れて來て、お前の手足に接吻するだらう。あの哀れな單純な奴どもは、お前の氣がふれるやうに、出來るだけの事をして、はては、お前が自惚のあまり狂人になるやうにして、それが終にはお前を身の破滅に導くのだ。さうなつても、お前は相變らず一人ぽつちだ。あいつ等にはお前を救ふ事が出來ないのだ。我々、我々だけが、敵があの邪惡な女を巴里で燒殺したあの火焙りの柱から、お前を救ふ事が出來るのだぞ。

ジョウン　（空を見上げて）あたしには、あんた方よりも一層いいお友達や、一層いい忠告があるわ。

大僧正　こんなかたくなな心の奴に何を話したつて無駄だ。お前は我々の保護を退けて、我々みんなを敵にする氣でゐるんだな。それなら、これからは自分で自分を守るがいい。若し失敗

したら神樣がお前の魂を憐んで下さるだらう。

デュノア　その通りだよ、ジョウン。よく聞いておくがいい、

ジョウン　あたしがこんな事を眞に受けて聞いてゐたら、あんた方はみんな今頃はどうなつてゐるでせう。あんた方は誰一人、力にもならなければ、相談相手にもなりやしない。さうだ、あたしはこの世で一人ぽつちよ。あたし、何時でもさうだつたわ。フランスが血を流して倒れようとしてゐるのに、あたし家にゐて羊の世話をしないからつて、父は兄弟達に言ひつけてあたしを溺死させようとしたの。仔羊さへ無事なら、フランスは滅びても構はないと言ふんだわ。あたし、フランスは王樣の宮廷に味方を澤山有つてるだらうと思つてゐた。ところが、フランスの哀れな引裂かれた肉の切つ端を爭ひ求める狼ばかりぢやないの。あたし、神樣はすべての人のお友達だから、何處へ行つても神樣のお友達がある事と思つてゐた。そして、何にも知らないあたしは、今こんなに棄てられるものとは知らずに、あんた方を大きな塔のやうにあたしを危險から守つて下さる人だと信じてゐた。でも今こそあたしには分つた。分つて損する者はない筈だわ。あたしを一人ぽつちだなんと言つて、あたしを怖がらせようつたつて、そりや駄

目だわ。神様も一人ぼつち、フランスも一人ぼつちです。あたしの國やあたしの神樣の一人ぼつちに較べれば、あたしの一人ぼつちなんて何でせう。今こそあたしには分つた、神樣の孤獨は神樣の力です。若し神樣が、あんた方の嫉妬深い取るにも足らぬ忠告に耳を傾けていらしたら、神樣はどうなつていらつしやるでせう。さうだ、あたしの孤獨もあたしの力になるのだ。神樣と二人きりでゐる方がよつぽど勝しだわ。神樣の友情、神樣のお告、神樣の愛はあたしを見棄てはなさらないでせう。神樣の力に縋つて、あたしは勇敢に進みます、勇敢に、勇敢に、死ぬ迄も。あたしは今こそ一般民衆のところへ行かう。あの人達の眼に輝く愛であたしを慰めて、あんた方の憎しみを忘れよう。あんた方はみんな、あたしが火焙りになるのが見たいのでせう。でも、あたしは火焙りになるなら、その火を通り抜けて、民衆の心の中へはひらう、永久に、永久に。さうなつたら、神樣、あたしをお守り下さい。

ジョウンは一同を後にして出てゆく。一同、むつちり默り込んで、暫くその後を眤と見送る。それから、ジル・ド・レエは聲をひれる。

青髯　全く、あんな奴つてあつたもんぢやない。僕はあいつが嫌ひと言ふ譯ぢやないが、あれ

ぢやどうにも仕末に終へない。

デュノア　神樣に誓つて言ふが、あの女がロアル河へ落つこちたんだつたら、僕は鎧のまゝで躍び込んで、あいつを救ひ上げてゐた事だらう。だが、あの女がコンピエヌで馬鹿な眞似をして、捕虜になつたつて、僕は構つてやるもんか。

ラ・ヒイル　ぢや、君はわしを鎖で縛つておいた方がいいぜ。あの女があんな風に意氣昂然として來ると、わしはあいつの後に續いて地獄までも一しよに行きたくなるぜ。

大僧正　あの女に會つちや、わたしの判斷さへ怪しくなる。あいつはかつとなつて暴れ出すと、恐ろしい力がある。然し、あいつの足元には陷穽が開いてゐる。それが善でも惡でも、我々にはあの女を引戾す力がない。

シャルル　あの女も、もう少し穩かにしてゐるか、さもなきや故里へ歸つてくれさへしたらいいんだが。

一同、悄然として彼女の後に從ふ。

第六場

處はルアン。一四三一年五月三十日、城中の大きな石造の廣間。公判の準備をしてあるが、陪審官裁判ではない。法廷は僧正の法廷で、宗教裁判に關與してゐる。從つて、裁判官としての僧正と宗教裁判官のために、一段高い二個の椅子が並んでゐる。其處から、多くの椅子が列をなして、鈍角に放射し、それは、陪席判事の役をつとめる、寺院評議員（カノン）達、法律及び神學の博士達、ドミニック派の修道僧達の席をなしてゐる。角には書記用の卓と腰掛。更に、罪人用の重い粗末な木造の腰掛。これ等は凡て部屋のこちら側にある。向う側は、一列のアアチを通して中庭に開いてゐる。法廷は、衝立やカアテンで日を除けてゐる。

こちら側の中央から部屋を見渡すと、裁判官の椅子や書記の卓は右手にある。罪人の腰掛は左手にある。左右にアアチ型の入口。朗らかに日の輝く五月の朝。

ウオリクは裁判官側のアアチ型の入口からはひつて來る。續いて小姓。

小姓　（出しやばつて）閣下もお氣付きのことでせうが、わたしどもは此處には用事がないやうに思ひます。これは坊さん達の裁判所で、わたしどもは俗人に過ぎませんからね。

ウオリク　それはわしも知つてゐる。お前は厚かましいから、一つボオエィの僧正を探し出して、お差支なければ裁判の開かれる前に此處で一言お話したい事があると合圖してくれないか。

小姓　（行きながら）はい、殿樣。

ウオリク　だが、出過ぎた振舞をしないやうにしろ。「信心深いペテル」なんて言つてはならんぞ。

小姓　そんな事は申しませんとも、殿樣。わたしは僧正には鄭重に致しませう。だつて、あの娘が引き連れて來られると、信心深いペテル、べそをかゝざるを得ませんからね。

コオションが同じ戸口から、ドミニック派の修道僧と寺院評議員と共にはひつて來る。寺院評議員は一通の書面を持つてゐる。

小姓　ボオエィの僧正閣下です。それから、坊さんが二人。

ウオリク　退つてゐろ。それから、誰かはひつて來ないか氣をつけてゐろ。

小姓　かしこまりました、殿樣。（氣取つて出てゆく）

コオション　やあ、閣下、お早うございます。

ウオリク　閣下、お早う。この方達には以前にお目にかゝつた事がありますかしら。どうも無いやうに思ふのですが。

コオシヨン　（右手にゐる修道僧を紹介して）こちらは、ジヨン・ルメイトル師、ドミニック派の方です。フランスに於ける異端の罪を裁く宗教裁判長の代理をつとめてゐられます。ジヨン師、こちらはウオリク伯爵です。

ウオリク　やあ、これはこれは。我々イギリスには宗教裁判官がないのです、不幸にして。我々はそれを非常に残念に思つてゐます、殊に目下のやうな場合に於ては。

宗教裁判官は辛抱強い樣子で微笑して、挨拶する。彼は、もの柔い、中年過ぎの紳士であるが、明らかに見識と鞏固さを十分具へてゐる。

コオシヨン　（自分の左手にゐる寺院訴議員を紹介して）これは寺院評議員ジヨン・デスチエ、ベイユウの僧團の方です。告發人（プロモオタア）の役をつとめてゐられます。

ウオリク　告發人と仰しやると？

コオシヨン　告訴人（プロセキユタア）の事です、普通の法律の言葉で言へば。

ウオリク　あゝ、告訴人。成程、成程。御面識を得まして恐悦です。

デスチエ　（挨拶する）！（彼は中年の若々しい男で、態度（ものごし）は立派であるが、それは猫をかぶつてゐるので見かけよりは狡猾である）

ウオリク　ところで、お訊ねしますが、取調はどの程度にまで進んでゐるでせうか。あの娘がコンピエヌでバアガンデイ人に捕縛されてから、今では既に九個月以上も經過してゐます。わたしがあの娘をバアガンデイ人から買ひ取つてから、滿四個月になります。それには莫大な金を拂つたのですが、それもたゞあの娘を裁判にかけるためでした。それから、異端の疑ある人間として、あの娘をあなたにお渡ししてから、三個月近くになりますよ。事件は至つて簡單明白なのに、あんたは決斷するのにどうも手間を取り過ぎてゐられあしないかと思ひますが、判決はまだお終ひにはならないのですか。

宗教裁判官　（微笑しながら）それどころか、まだ始まつてゐないのです。

ウオリク　まだ始まつてゐない！　ほう、もう十一週間もたつのに！

コオシヨン　我々はなまけてゐた譯ぢやありません。あの娘は既に十五回審問してゐるのです。

六回は公に、九回は個人的に。

宗教裁判官　（絶えず辛抱强い樣子で微笑しながら）ところで、わたしはその審問にたつた二回出席してゐるに過ぎません。それ等の審問は全然僧正の法廷で行はれたもので、宗教裁判所（ホオリィ・オフイス）の關與してゐるものではなかつたのです。わたしはたつた今、參加しようと決心したのです――即ち、宗教裁判を――僧正の裁判に合併しようと決心したのです。わたしは最初、これを全然異端の事件とは考へてゐませんでした。これは政治上の事件で、あの娘は戰爭の捕虜であると考へてゐたのです。然し、二回の審問に出席して見て、どうもこれはわたしの經驗からして異端の最も重大な事件の一つだと思はざるを得なかつたのです。ですから、今や凡ての準備を整へ、我々は今朝公判を始める事になつたのです。（裁判席の方へ進む）

コオション　閣下の御都合がよろしいなら、只今からでも。

ウオリク　（愛嬌よく）ああ、それはいい事を聞きました。隱さずに申せば、我々はもう我慢がし切れなくなつてゐたのです。

コオション　わたしは、あなたの軍人達から、我々の中であの娘に好意をもつものは河へ投げ

こむぞと言ふ凄文句を頂戴したので、さうと察してゐました。

ウオリク　おや／＼。然し、どの道あいつ等の考もあなたには惡くはなかつたでせう、閣下。

コオション　（嚴かに）わたしはそんな事を望みません。わたしはあの女に正當な裁判をしてやる決心です。教會の裁判は人を嘲弄する事ではありません。

宗教裁判官　（戾つて來て）わたしの經驗から見て、これ以上正當な審問が行はれた事はありません。あの娘には、自分の味方してくれる辯護士の必要がありません。あの娘は、自分の最も忠實な友人の手に依つて裁かれる事になるでせう。みんなは熱心にあの女の魂が地獄へ墮ちるのを救はうと望んでゐるのです。

デスチエ　わたしは告發人です。あの娘を告訴する事はわたしとしては實に辛い役目でした。然し、學問に於て神を敬ふ事に於て、辯舌や人を說く事に於て、わたしより遙かに勝れた方々が、あの女を說得し、あの女が陷つてゐる危險や、又、それを避ける事の如何に容易であるかを、あの女に言ひ聞せるためにお見えになつてゐるのです。若しさうでなければ、わたしは今日にも訴訟を放棄して、急いであの女を護辯した事でせう。（急に裁判官風な雄辯さになつて、今

迄賛成するやうな賞讃を以て耳を傾けてゐたコオションと宗教裁判官を不快にさせる）世間は、我々が憎しみの心からかかる事をしてゐるやうな暴言を吐くものがあるのです。然し、それは嘘です、神が我々の證人です。我々はあの女を苦しめてゐたでせうか。そんな事は斷じてありません。我々は絶えず、あの女を訓戒し、あの女に己を憐むやうにと懇願し、道を迷へる然し愛すべき子として教會の胸に歸るやうにとすすめてゐたのです。我々は――

コオション　（不愛想に口を挾んで）氣をおつけなさい。あなたの言葉は一言一句ほんとうではあるが、ウオリク閣下がそれを信じられるなら、あなたの命、いやわたし自身の命も、危くならないとも限りませんよ。

ウオリク　（不同意に思ひながら、然し決して反對する事なく）あゝ、閣下、どうもあなた方は我々イギリス人に對してひどく辛くお當りになる。然し、我々は、あなた方のやうにあの娘を救はうとする敬虔な願をもつ譯にはゆきません。實際、明らさまに言へば、あの女を殺すのは政治上必要な事であつて、わたしはそれを遺憾に思ひますが、どうする事も出來ません。若し教會があの女を釋放するなら――

コオション　（烈しく威嚇するやうに傲然と）若し教會があの女を釋放した曉、あの女に指一本でも觸れるものがあれば、假令皇帝であらうと、呪がかゝるのだ！　教會は政治上の必要に屈從するものではありません。

宗教裁判官　（穩かに口を挾みながら）あなたは裁判の結果については何も御心配なさるには及びませんよ。あなたはこの事件では實に強い味方を有つてゐられるのです。あの女が必ず火焙りになると、あなたよりも堅く信じてゐる人間をね。

ウオリク　さう言ふ至極重寶な味方と言ふのは誰でせうか。

宗教裁判官　あの娘自身です。あなたはあの女の口に猿轡でも嵌めない以上は、口を開く度に十遍以上も自分に罪のあるのを喋り立てて、あなたの力ではそれをどうする事も出來ないでせうよ。

デスチエ　それは全くその通りです。あんな若い小娘が、あんな罰當りな事を口にするのを聞くと、わたしの髮の毛は逆立つ程だ。

ウオリク　ぢや、たしかに無駄だとお考へになる事なら、精々あの女のために全力を盡して頂

きますかな。（コオションを烈しく見詰めながら）わたしは教會の祝福を受けずに行動しなければならないのを殘念に思ひますよ。

コオション　（皮肉な讚賞と嘲笑とを交へて）而も、イギリス人は僞善者だと言ふ噂ですね。閣下、あなたは自分の魂が危險に陷つてゐる時でさへ、威張つた眞似をなさるのです。さう言ふ熱心さには、わたしはたゞ〱賞讚の外はありません。然し、わたし自身はどうもそのやうな極端に走る勇氣はありません。わたしは、地獄へ墮ちるのが怖いのです。

ウオリク　我々は、何か怖いものがあるとすれば、イギリスを支配する事が出來なかつたでせう。さて、陪席の方々を此處へお呼びしませうか。

コオション　何卒。閣下が御退出下さつて、法廷へ一同集る事が出來れば、至極好都合です。

ウオリクは踵を返して、中庭から出てゆく。コオションは裁判官席の一つに著座する。デスチエは書記の机に坐つて、書面を調べる。

コオション　（居心地のいゝやうに坐りながら、出委せに）あのイギリスの貴族達は何て惡黨だ。

宗教裁判官　（コオションの左手の裁判官席に坐つて）俗界の權力は人間を惡黨にするのだ。あの

連中はかういふ仕事には修業が出來てゐないし、羅馬法王には緣のない人間だ。我國の貴族だつて、あれに劣らぬ惡黨ばかりだ。

大僧正の陪席判事達が廣間へはひつて來る。先頭には、牧師ド・ストガンバア及び、三十歲の青年僧である寺院評議員ド・クウルセル。書記達は卓に坐り、デスチエの向ひ側の椅子を一つ空けておく。陪席判事達の幾人かは著席し、幾人かは立つて喋り合つて、審問が正式に始まるのを待つてゐる。ド・ストガンバアは、苦しんでゐる樣子で、頑固に席に著かうとはしない。彼の右手にゐる寺院評議員も同じやうに坐らうとしない。

コオション　お早う、ド・ストガンバア氏。（宗教裁判官に）イギリスの大僧正の牧師。

牧師　（彼の言葉を訂正して）いや、ウインチスタアの。わたしは是非抗議しなければなりません、閣下。

コオション　あなたは何かと言へば抗議を申される方ですね。

牧師　わたくしには後楯がない譯ではありません。此處にゐられる巴里の寺院評議員ド・クウルセル君が、わたしの異議申立てに組してゐられるのです。

コオション　では、異議と仰しやるのは？

牧師　（すれて）君から話してくれ給へ、ド・クウルセル君。僕はどうも僧正閣下の信頼に浴する事が出來ないやうだから。（立腹の體でコオションの右隣りに坐る。）

クウルセル　我々はあの娘を告發する七十四個條の罪狀を摘發するのに非常な苦心を拂つたのです。ところが、今話に聞けば、我々に一言の相談もなく、その個條が削減されたとの事ですが。

宗教裁判官　ド・クウルセル君、わたしがその責任者です。諸君の七十四個條に現はれた熱心さには、實に敬服の外はないが、異端の罪を問へば、その他の事は十分の上に十分ではなからうかと思ふ。尙、法廷につらなる一同は、あなた方のやうに鋭敏でも聰明でもなく、あなた方の勝れた研究の或點は、却つてひどく無意義に見えるかも知れないと言ふ事を御記憶願ひたい。であるから、わたしは適當と考へて、あなた方の七十四個條の罪狀を削つて、十二個條に――

クウルセル　（雷に打たれたやうに）なに、十二！

宗教裁判官　十二個條であなた方の目的に十分かなふ事と信じるが。

牧師　然し、最も重大な點のいくつかが削減せられて、殆んど臺なしになつてゐるのです。例へば、あの娘は、聖マアガリツトや聖キヤサリンや、天使長ミカエルが、フランス語で話しかけられると、實際主張してゐる。これが重大な點です。

宗教裁判官　では、あなたは、疑もなくそれはラテン語で話されてゐる筈だと思ふのですね。

コオション　いや、英語で話されてゐる筈だと、この人は思つてゐるんです。

牧師　無論さうです。

宗教裁判官　ところが、あの娘の耳にした聲は、地獄へ誘惑する惡靈の聲であると、此處にゐる一同の意見が一致してゐるので、英語が惡魔の國語であると假定するのは、ド・ストガンバア君、あなたやイギリス王に對して禮を缺く所以ではないかと思ひます。ですから、これは不問に附しませう。この事は十二個條から全然省いてある譯ではありません。どうぞ、御著席下さい。さて、判決にはひる事にしませう。

（まだ坐つてゐなかつたものも殘らず著席する。）

牧師　ぢや、わたしは異議を申立てます。それつきりの事だ。

クウルセル　我々の遣つた事が殘らず無効に歸すなんて、實に心外の至りだ。これは、あの娘が法廷に與へた惡魔の影響の新しい實例に過ぎない。（牧師の右手に席をとる）

コオシヨン　わたしが惡魔の影響を受けてゐるとでも言はれるですか。

クウルセル　いや、そんな意味ではありません。然し、此處には、あの娘がサンリの僧正の馬を盜んだと言ふ事實を揉み消さうとする陰謀があるやうにわたしには思へるのです。

コオシヨン　（やつきの事で怒を制しながら）此處は警察ではない。そんな下らない事に時間を浪費してもいゝと思ひますか。

宗教裁判官　（温和に）クウルセル君、娘の申立てに依れば、僧正の馬には相當の金を支拂つたので、その金が僧正の手にはひらなかつたとしても、それは自分の罪ではないと言つてゐるのです。これは事實かも知れないから、この點は娘のために不問に附して差支ないでせう。

クウルセル　そりや、普通の馬ならはそれでもいゝでせう。然し、僧正の馬ぢやありませんか！それをどうして不問に附す事が出來るのです。（當惑し、落膽して再び坐る。）

宗教裁判官　甚だ失敬ではあるが、君に注意を促しておきたいのは、あの娘を無罪であると宣

言しなければならなくなるやうな詰らない論點で、若し彼々が、あの娘を執拗に審問するならば、異端といふ重大な論點ではあの娘に言ひ拔けられないとも限らないと言ふ事である。今日までのところでは、あの娘は自分の罪は異端にあると主張してゐるやうに思へる。であるからあの娘が此處へ連れて來られた時には、馬を盜んだとか、魔法の木のまはりを田舍の子供と一しよに踊を踊つたとか、魔の泉でお祈りをしたとか、その他、わたしが到着する迄に、君方が勤勉に調べ上げてくれた多くの事柄については、何事も言はずにゐて貰ひたい。フランスの田舍娘で、そんな事をしないと言へる者は一人としてないのだ。あいつ等は、魔の木のまはりで踊も踊れば、魔法の泉でお祈もする。中には、機會があれば法王の馬だつて盜みかねない奴もゐる。異端、異端こそ我々の取調べなければならない罪狀である。異端を摘發し鎭壓するのがわたしの特別の務である。わたしは宗教裁判官として此處へ列席してゐるのであつて、普通一般の奉行としてではない。諸君、何よりも異端といふ點に全力を注いで、その他の事は顧ないで頂きたい。

コオシヨン　我々はあの娘の村へ人を遣し、調査さしたが、事實、娘を罪に問ふべき何等重大

な事がないのです。

牧師。クウルセル　（立上つて同時に騷ぐ）重大な事がない――何ですと！　魔法の木が――

コオション　（我慢がし切れなくなつて）靜かにしなさい、でなければ、一人づゝ喋りなさい。

クウルセルは威嚇されて、ぐつたりと椅子に坐る。

牧師　（膨れつ面で席に坐つて）それは、あの娘が先週の金曜に我々に言つた事だ。

コオション　では、あなたはあの女の言ふ事に從つたらいゝでせう。わたしが重大な事がないといふ意味は、このやうな取調をなすに當つて十分に大きな心を持つた人間なら、重大だと考へるやうな事がないと言ふのです。異端の點こそ、我々の審問すべき罪狀であつて、その點わたしは同席の宗教裁判官と意見を同じくするものです。

ラドヴニユ　（若い、然し禁欲でほつそり體の引締つたドミニツク派の僧で、クウルセルの右隣に坐つてゐる）然し、あの娘の異端には、大した害があるでせうか。單にあの娘の單純無知なせいではないのですか。多くの聖者達はジヨウンと全く同樣な事を言つてゐるのです。

宗教裁判官　（溫和な態度をなくして、非常に嚴格に話す）マルチン師、若し君が、異端について

わたしが見たやうな事を見るなら、明かに害のない、その上愛すべき敬虔な動機のものであらうと、君はこれを輕々しい事だと思ひはしまい。凡ての者の眼に周圍の人よりはよく見える人間が、異端を始めるのだ。心優しく信心深い娘、或は、神の命に從つて、己の富を貧者に與へ己は貧の衣を纏ひ、謹嚴無欲の生活、謙讓と博愛の規律に身を委せる若い男が、却つて異端の創始者であつて、それは時を移さず容赦なく根絕しなれば、教會と帝國を滅すかも知れないのだ。神聖宗教裁判の記錄は、我々が世に示すだけの勇氣のない歷史で充ちてゐる。それは、善男善女の信仰の埒を越え、而もすべて聖者のやうに見える馬鹿者に端を發してゐるのだ。わたしは、再三再四それを見てゐる。であるから、わたしの言葉に注意して頂きたい。女の癖に自分の服裝を嫌つて、男の着物を着る女は、毛皮の外套を投げ棄てゝ、ジヨン洗禮信徒（ザ・バプティスト）のやうな服裝をする男と同樣なのだ。かゝる人間の後へは、夜に日が續くやうに明らかに、一糸の衣服も身に纏ふのを肯（がへん）じない野獸のやうな男女の群が續くのだ。若し年若い娘が、結婚も欲せず、普通の誓も守らないなら、若し男が結婚を拒けて、自分の肉欲を淨い靈感で高めるならば、軈て夏が春に繼ぐやうに明らかに、一夫多妻、一妻多夫を始めて、破倫の行に終るのだ。異端は

最初は、清淨無垢にして、賞讃すべきものにさへ見える。然し、それはやがて自然に反する惡の不埒極まる恐怖に終り、諸君のうちの最も心優しい人でさへ、わたしのやうにそれが活動するさまを目撃せられるなら、教會の慈悲によつてそれを處分するやうにと囃ぎ立てられるであらう。過去二百年の間、宗教裁判所は此等惡魔如き狂氣と戰つて來た。そして、かゝる狂氣の沙汰は必ず、虛榮強き無智な人間が、教會に對して自分勝手な判斷を下して、自分を神の意志の通譯であると自惚れる事から始まるのだ。この馬鹿者をば嘘つきや僞善者であると、ともすれば思誤り勝ちであるが、諸君は、さう言ふ失策に陷つてはならない。であるから、諸君は自然な同情心に抗つても、警戒しなければならない。どうか諸君はすべて慈悲深い人間であつて頂きたい。それ以外に、どうして我々の優しい救世主に命を捧げて仕へる事が出來よう。諸君は聽て、年若い娘の、信心深く淸らかなのを見られる事でせう。イギリスの方々があの娘について言はれた事は、何等の證據もないが、あの娘の極端に走つたのは宗教と博愛の點であつて、俗事や放縱の點ではないと言ふ十分な證據があると言ふ事を、諸君に申上げておかなければならない。殘忍な容貌が苛酷な心のしるしであり、厚かましい顏付や淫亂な振舞のために、罪に

問はれない先から罰せられてゐる人間も多いが、あの娘はさういふ人間ではないのです。あの女を現在危險に陷入れてゐるあの惡魔の傲慢さは、彼女の容貌には何等の痕跡をも現はしてはゐない。諸君は恐らく不思議に思はれるだらうが、あの女が自慢にしてゐる特別な事柄は別として、それは彼女の性格にさへ何等の痕跡をも殘してはゐないのです。であるから、諸君には惡魔の傲慢さと自然な謙讓さとが、同じ魂の中に並び合つて座を占めてゐるのがお分りでせう。それ故、御用心なさるがいゝ。然し、諸君に心を苛酷になさいと申上げる事は、神の禁じられるところです。若しあの娘を罰するとしても、その罰は苛酷なものであつてはならない。我々の心にあの娘に對する一點の惡意でも存するならば、神の慈悲を望む我々の願は無効に終るやもはかり知り難いのである。若し諸君にして苛酷を憎まれるならば——此處に御列席の諸君のうち、それが厭だと申される方があるなら、その方の魂を救ふためにこの神聖な法廷を退場なさる事を命令します——ですから、若し諸君にして苛酷を憎まれるならば、異端を許す事程、結果に於て苛酷なものはないといふ事を御記憶願ひたい。尙又、異端の疑ある人間に對する一般人民の殘酷さは、如何なる法律の法廷も遠く及ばない程であるのを御記憶願ひたい。宗教裁判

所の手では、異端は暴力に訴へられることなく、正當な裁判を保證せられ、罪ありと雖も、罪を知つて悔い改めるところあれば、死刑の苦しみを免がれる事が出來るのである。今迄に異端の徒の數限りない命が、救はれてゐるが、それは、宗教裁判所が人民の手から異端の徒を受取つたためであり、人民の方でも、宗教裁判所が處理するのを知つて、異端を手渡してくれたためである。宗教裁判の存在しない以前は、今日と雖もその役人の手の屆かぬところでは、異端の嫌疑をうけた不幸な惡人は、恐らくは譯も分らずその上不當な遣り方で、石を投げられ、引裂かれ、水中へ投げ入れられ、罪のない子供達と一しよに家を燒拂はれるのだ。裁判も受けなければ、懺悔も聞かれず、埋葬もされない、もし埋葬されるにしても犬が埋められる位の程度である。かかる行爲はすべて、神の憎み給ふものであり、人間にとつてこの上なく殘酷なものである。諸君、わたしは性質から見ても、職務上から言つても、同情に富む人間です。わたしの爲すべき仕事は、それをなさずにおけば一層遙かに殘酷になるのを知らない人々の目には、殘酷に見えるかも知れない。然しながら、この仕事の正しさ、この仕事の必要、この仕事の眞の慈悲を知つてゐればこそ、わたしはこれをするのです。若しそれを知らなければ、この仕事

をするよりは寧ろ、わたし自身火焙りの柱に登るでせう。わたしは、この審問にはこの確信を以て發言せられん事を、諸君に望みます。怒は惡い相談相手です、怒を棄てゝ下さい。憐みの心は時とすると一層惡い相談相手です、憐みの心も棄てゝ下さい。けれども、慈悲の心、これは是非棄てずに頂きたい。正義が第一である事を忘れないで頂きたい。さて、閣下、判決に入る前に何か御話になる事がありますか。

コオション　あなたはわたしに代つて話し下さつて、その上、わたしが出來るよりも立派に話して下さつた。正氣の人間であるなら何人と雖も、あなたの口から漏れた言葉に一言たりとも不同意を唱へるものは無いと思ひます。然し、わたしはこれだけ附加へておきます。あなたがお話になつた野蠻は恐るべきものではあるが、その恐れは黑死病の恐れに似たものであつて、暫くは荒狂ふが、軈て死に絶えてしまふのです。何故なら、健全な分別ある者なら、如何に唆かされようと、裸體、破倫の行、一夫多妻、その他それに類する事には手を差伸べる筈がないのです。然し、今日はヨオロッパを通じて、我々は一つの異端に面接してゐるのであつて、それは心も弱くなければ、頭も狂つてゐない人間の間に擴がつてゐるのです。いや、心が強けれ

ば強い程、異端の徒は頑固になるのです。それは、極端な幻想によつて信用を失ふものでもなく、普通の肉欲に依つて墮落するものでもない。然し、それは敎會の重ずべき智慧と經驗に抗つて、誤多い一個の神ならぬ人間の癖に私勝手な判斷をつくるのである。カソリックのキリスト敎團の力強い組織は、裸の氣違の力や、モアブやアモンの罪によつて搖ぐものではない。然し、それは、イギリスの指揮官がプロテスタンテズムと呼ぶあの美しい異端の娘の手に依つて内部から裏切られて、滅亡と荒廢に陷つて野蠻な昔に歸るかも知れないのです。

陪席判事達　（囁く）プロテスタンテズムだと！　それは何だ。僧正の仰しやるのはどういふ意味だ。それは新しい異端なのか。イギリスの指揮官だつて。君はプロテスタンテズムの事を聞いた事があるか。等、等。

コオシヨン　（言葉を續けて）そこで、わたしはかう思つたのです。若しあの娘が强情を押し通して、人民が心を動かされあの娘を憐むやうになつた場合、俗人を防ぐためにウオリク伯爵はどういふ準備をしてゐるのでせうか。

牧師　いや、その點は御心配には及びません、閣下。伯爵は八百の兵士を門前に控えさしてゐます。若し町中の者があの女の味方をしても、あの女は我々イギリス人の手を脱れる事は出來ますまい。

コオシヨン　（機嫌を惡くして）ところが、神は、あの娘が悔悟して、罪を淨めるのをお許し下さるでせう。

牧師　わたしはそんな結果にならうとは思ひませんが、そりや無論、わたしは閣下の御意見には賛成です。

コオシヨン　（輕蔑するやうに肩を聳かして、答へるのを止めて）法廷の諸君、御著席下さい。

宗敎裁判官　被告を呼び入れて下さい。

ラドヴニユ　（呼ぶ）被告。被告を此處へ連れて來い。

ジヨウンが足首のところを鎖で繋がれて、囚人の腰掛の後のアアチ型の戸口から、イギリス兵に護衞せられてはひつて來る。護衞兵と共に、死刑執行人とその助手。彼等はジヨウンを囚人の腰掛へ導き、彼女の鎖をはづしてから、その後の席に坐る。ジヨウンは小姓の黑い服を着てゐる。長い間の幽閉と、裁判に先だつて絶えずなされた幾度かの審問の苦しみとの跡が、彼女の上に殘つてゐ

るが、元氣は依然として衰へない。彼女は臆するところなく法廷に面を向けて、更に畏れる色も見せない――しかつめらしい嚴かな法廷は、かかる畏れの色を要求して十分な効果を目指してゐるのであらうけれど。

宗教裁判官　（優しく）お坐り、ジョウン。（ジョウンは四人の腰掛に坐る）お前は今日は大層顏色が惡い。氣分でもよくないのか。

ジョウン　有難う。あたし元氣ですわ。でも、僧正さんが鯉を數匹下さつたのですが、あたしそれで氣分がすぐれないのです。

コオション　そりや氣の毒だつた。いき、がいゝかどうか調べるやうにと言ひつけておいたのだつたが。

ジョウン　あんたが親切にして下さるおつもりだつたのは分つてゐますわ。でも、鯉つて魚はあたしの性には合はないのです。イギリス人は、あんたがあたしを毒殺するんだと思つて――

コオション。牧師　（一しよに）何と言ふのだ！　そんな事はありません、閣下。

ジョウン　（言葉を續けて）イギリス人はあたしを魔法の女として燒殺すことにきめてゐるんで

す。だもんだから、あたしの病氣をなほさうと思つてお醫者を寄越してくれたの。でも、お醫者はあたしから血を流しちやいけないつて言はれてゐたのよ。若し魔法使から血を流すと、魔法の力がなくなるつて事を、馬鹿な人達はほんとうにしてゐるんですもの。ですから、お醫者はただあたしを口穢く罵つて行つただけだわ。何故あんた方は、あたしをイギリス人に委せておくんです。あたし、教會のお世話になるのが當り前だわ。それから、何故あたしの足を鎖で縛つて、丸太なんかに繫いでおかなくちやいけないんです。あたしが逃げ出すのを怖がつてゐるの？

デスチエ　（烈しく）これこれ、判事の皆樣に質問するのがお前の役目ぢやなくて、お前に質問するのが我々の役目なんだ。

クウルセル　お前を鎖で繫いでおかなかつた時、お前は六十呎も高い塔から飛び下りて脫走しようとしたではないか。お前に魔女のやうに飛ぶ力がないなら、まだ命のあるのは一體どうした譯だ。

ジョウン　あの時は塔はそんなに高くなかつたからだと思ふわ。あんた方が塔の事を質問し始

めてから、塔は毎日段々高くなつたんだわ。

デスチエ　お前は、何故塔から飛び下りたんだ。

ジヨウン　あたしが飛び下りたのを、あんたはどうして知つてゐるの。

デスチエ　お前は、お濠にはひつくばつてゐたぢやないか。何故、塔を逃げ出したんだ。

ジヨウシ　誰だつて、逃げられるものなら、牢獄から逃げない人があるでせうか。

デスチエ　ぢや、脱走しようとしたんだな。

ジヨウン　勿論さうよ。そして、あれが初めてぢやないわ。籠の戸を開けておけば、鳥は逃げ出してしまふものよ。

デスチエ　（立上つて）これこそ異端の告白です。これに對する法廷の皆さんの御注意を促したい。

ジヨウン　異端ですつて。牢屋から逃げ出さうとしたからつて、あたしは異端なの？

デスチエ　勿論異端だ。教會に身を委せてゐながら、教會の手を離れて勝手氣儘に振舞ふならば、それは教會を棄てて顧ないのだ。それこそ異端だ。

ジヨウン　何て馬鹿なことを。誰だつてそんな事を考へるやうな馬鹿ぢやないわ。

デスチエ　お聞きでしたか、閣下。わたしが自分の義務を遂行してゐるのを、この女のために口ぎたなく罵られるなんて。（ぷりぷり怒つて坐る。）

コオシヨン　これ、ジヨウン、そんな生意氣な返答してはお前のためにならんと、前以て注意しておいたではないか。

ジヨウン　でも、あんたは、あたしに譯の分つた事をお話にならないんだわ。あなたが筋道の立つた事を仰しやるなら、あたしだつて筋道の立つた事を言ふわ。

宗教裁判官　（口を挾んで）これではまで法則通りではない。デスチエ君、告發人として君は裁判がまだ正式に開かれてゐないのを忘れてゐられる。この娘に眞實を殘らず話すと福音書に誓を立てさせた上で、質問の時に移るべきです。

ジヨウン　あんたは何時でもあたしにさう仰しやるのね。あたし、この裁判に關係のある事は何もかもお話するつて、幾度も言つてるぢやないの。でも、ほんとうの事をすつかりお話する譯にはゆかないわ。神樣が、ほんとうの事をすつかり話してもいいつて仰しやらないんですも

の。あたしがさう言つても、あんたには分らないんだわ。眞實を言ひ過ぐるものは必ず絞殺されるつて、古い諺があるわ。あたし、こんな議論には飽々しちやつた。もう九遍も繰返したんですもの。あたし誓へるだけ誓つたわ。もうこの上誓はないつもりです。

クウルセル　閣下、この女は拷問にかけるべきです。

宗教裁判官　聞いたか、ジョウン。何時までも强情を通すと、そんな目に會ふんだぞ。さあ、返答する前によく考へて御覽。この娘に拷問の道具は見せたか。

死刑執行人　はい、用意は出來てゐます。この女にも旣に見せました。

ジョウン　若しあんたが、あたしの手肢を引裂いて、あたしの體から魂を引放したつて、あたしがこれ迄に話した事以外には、何にもお聞きになる事は出來やしないでせう。あんた方に話したつて分らないのに、あたしこの上何を話す事があるんです。それに、あたし拷問にかけて苦しめられるのには我慢が出來やしないわ。だから、あたし苦しめられるなら、苦痛を脫れるために、あんた方の好きなやうに何でも言ふつもりよ。でも、後になつたら、それをすつかりさうでないと言ひ變へるわ。さうすりや、そんな事をしたつて何の役に立つんです。

ラドヴニュ　成程、尤もな言分だ。我々は慈悲深く裁判を進めるべきです。

クウルセル　然し、拷問は慣例です。

宗教裁判官　拷問は亂りに適用すべきものではない。若し罪人が自ら進んで告白するならば、拷問を用ゐるのは正しい遣り方ではない。

クウルセル　然し、これは滅多にない、特殊な場合です。この女は誓を立てるのを拒んでゐるのです。

ラドヴニュ　(不快に感じて) あなたは單に面白半分にこの娘を苦しめたいのですか。

クウルセル　(當惑して) いや、面白いからではない。これは掟です。慣例です。何時でも行はれて來た事です。

宗教裁判官　いや、それはさうではない。法律の役目を知らない人々が、審問を行ふ場合ならいざ知らずだが。

クウルセル　然し、この女は異端です。拷問は今迄常に行はれて來た事ではありませんか。

コオション　(決然たる態度で) 今日では、必要でないなら、それは行はれなくなるのだ。拷問

の事はこれで打切りにしませう。我々は無理に白狀させたと言はれたくはない。我々は既に一流の教誨師や博士達を遂つて、この娘の魂や肉體を火焙りから救ふやうに戒め懇請して來たのだ。それを今になつて、我々は死刑執行人の手に渡さうとは思はない。

クウルセル　言ふまでも無く、閣下は慈悲深い方でゐられます。然し、慣例を破るのは重大な責任問題です。

ジョウン　あんたのやうな馬鹿なんて、滅多にあるもんぢやないわ。前にした事なら、何でもあんたの規則になるの、え。

クウルセル　（立上つて）なにを、この尼つちよが。お前はわしを馬鹿だと言ふのか。

宗教裁判官　靜かに。まあまあ、我慢なさい。どうもあなたと來ちや、何かと言ふとすぐに怨をふくまれるやうだ。

クウルセル　（呟く）馬鹿だと、そんな事が。（ひざゝ不滿な樣子で坐る。）

宗教裁判官　とにかく、羊飼の娘の言葉には粗野な一面があるが、我々はそれで心を動かされてはならないのです。

ジョウン　いいえ、あたし羊飼の娘ぢやないわ、他の者のやうに羊の世話をしてゐたにはゐたけれど。あたし、家にゐれば女の仕事を——糸を紡いだり、布を織つたりするでせう——ルアンのどの女にだつて負けやしないわ。

宗教裁判官　虚榮（みえ）をはる時ではない、ジョウン。お前は恐ろしい危險に臨んでゐるのだ。

ジョウン　ええ、そりや分つてゐるわ、あたし、虚榮（みえ）をはつた罰を受けてゐるぢやありませんか。あたし、阿呆のやうに戰場で黄金の陣羽織なんか著てゐなかつたら、あのバアガンディの兵隊に馬からひき下ろされてゐはしないでせうし、此處へ來てゐもしないでせうに。

牧師　お前はそんなに女の仕事が上手なのなら、何故うちにゐて、それをしないのだ。

ジョウン　それをする女は他に澤山ゐるわ。でも、あたしの仕事をするものは誰もゐやしないんです。

コオシヨン　諸君！　我々は下らない事で時間を浪費してゐる。さあ、ジョウン、わたしはこれからお前に最も重大な質問をするつもりだ。どう返答していいか、よく考へて御覽。お前の命もお前の救も一にその返答にかかつてゐるのた。お前は、これ迄に言つた事なした事全部に

對して、それが善いことであれ惡い事であれ、地上の神の教會の裁きをうけるつもりでゐるか。此處にゐられる告發人が、この裁判でお前に責任を問ふべきだと言はれる行爲や言葉はとにかくとしても、もつと大事なことは、お前の事件を地上教會の靈感をうけた解釋だと認めるかどうだ。

ジョウン　あたしは教會の忠實な子です。あたしは教會に服從して――

コオシヨン　（これは望があると許りに椅子をのり出して）お前が？

ジョウン　――教會が不可能なことを命令なさらなければ。

コオシヨンは重い溜息をついて椅子にどつかりと凭れる。宗教裁判官は口をつぼめ眉をしかめる。

ラドヴニユは憐むやうに頭を振る。

デスチエ　この女は、不可能な事を命ずるやうな過ちと間抜さを、教會になすりつけようとするのだ。

ジョウン　若しあなた方が、あたしが今迄に言つたり行つたりしたこと全部、あたしが見た幻や啓示をのこらず、神樣のお告ではないと聲明しろと命令なさるなら、それは不可能なことで

す。どんなことがあらうと、あたしそんなことは聲明しない。神樣があたしにおさせになることは、あたし決して逆ひはしない。神樣が命令なすつたこと、これから命令なさることは、誰が何と言はうと、必ずやりとげて見せるわ。あたしが不可能だといふのはこのことです。ですから、神樣の下さつた命令に反對するやうなことを、教會があたしにしろと仰しやるやうな場合があれば、それが何であらうと、あたしそれに反對するつもりです。

陪席判事達　（吃驚して、怒り立つて）おゝ！　教會が神に反對するつて！　何を言ふのだ。まさしく異端だ。言語に絕する。等、等。

デスチエ　（書面を投げ棄てて）閣下、これ以上調べる必要がありますか。

コオシヨン　これこれ、お前は十人の異端を火焙りにする程のことを言つたのだぞ。注意しておいたではないか。お前には分らないのか。

宗教裁判官　お前の啓示や幻は、お前を誘惑して地獄へ墮すための惡魔の仕業だと、地上教會が言ひきかせてやつても、教會はお前より賢明だといふ事をお前は信じないのか。

ジョウン　神樣はあたしより賢明だといふ事は信じます。そして、あたしのしようとする事は

神様の命令です。あなたがあたしの罪だと仰しやる事は殘らず、神様があたしに下さつた御命令でした。あたし、神様の御指圖に從つてそれをしたのです。他の事を言へと言はれたつて、あたしにや出來やしない。どんな牧師さんだらうが、反對の事を仰しやるなら、あたし聞きやしません。あたしは、神様お一人のことを聞いて、何時もその御命令に從ふのです。

ラドヴニユ　（熱心に彼女のために嘆願して）お前は子供で、自分の言つてゐる事を知らないんだ。お前は、自分で自分を殺したいのか。まあ、お聞き。お前は、地上の神の教會に從つてゐるのだといふ事を知らないのか。

ジヨウン　ええ、さうよ。あたしさうでないと何時言つて？

ラドウニユ　よしよし。お前は、我々の主である法王や、法王廳閣員（カアディナル）や、大僧正や、僧正に隷屬してゐるといふ意味だらう。今日それを代表して此處にゐられる閣下にね。さうぢやないのかい。

ジヨウン　先づ第一に神様に仕へなくちやいけないわ。

デスチエ　ぢや、お前のお告は、地上教會には服從しないでいいと命令するんだな。

ジヨウン　あたしのお告は、教會に服從しなくていいつて言ひあしないわ。でも、神様に第一に仕へなくちやいけないのです。

コオシヨン　では、裁くものは教會ではなくて、お前なのか。

ジヨウン　あたし、自分の判斷で裁かなくて、どうして裁くのです。

陪審判事達　（憤慨して）おゝ！（彼等は何と言つていいか分らない）

コオシヨン　お前は、自分の口で自分を罪に陷入れるのだ。我々は、自分達が罪に陷らうとする危險まで冒して、お前を救はうと努力して來たのだ。我々は再三再四お前のために戸を開けてやつた。而も、お前は、我々の面前で、神の面前で、それを閉ぢるのだ。お前は、今のやうな事を言つておきながら、圖々しくも神様のお惠みを享けてゐるやうなふりをするのか。

ジヨウン　あたしがお惠を享けてゐないなら、神様、どうぞそれをお與へ下さい。若し享けてをりますなら、神様、何時までもそれをお取上げなさらないで下さい。

ラドヴニユ　これは全く立派な返答です、閣下。

クウルセル　お前は僧正様の馬を盗んだ時にも、お惠みをうけてゐたのか。

コオション　（激怒して立上つて）何を言ふのです。僧正の馬も君も、惡魔に摑まれてしまふがいい。我々はこの法廷で異端の事件を調べなければならないのだ。それなのに、我々がその事件の根本に觸れて來たと思ふや否や、又後へ引き戻されてしまつたのだ、馬のことしか分らない馬鹿者のために。（怒で身顫ひしながら、やつとの事で椅子に坐る。）

宗教裁判官　諸君、諸君。かういふ下らない論點に拘泥してゐるなんて、諸君はこの娘の實に見上げた裁判官と申さなければならん。僧正閣下が諸君に立腹されたのも、敢て驚くには當らない。告發人たるものが何を言ふのです。かかる詰らない事件を論及するのですか。

デスチエ　わたしは職務上あらゆる事を論及しなければならないのです。然し、若しこの女が異端の罪を白狀すれば、破門の運命に會はなければならないのであつて、さうなれば、小なる懲(こら)しめに會ふやうな犯罪は何等重大なものではありません。かゝる小なる罪科については、わたしも閣下と共に默認したいと思ひます。たゞ失禮をも顧みず、わたしは、神を瀆す恐るべき二つの犯罪の重大なる事を力說しなければなりません。第一に、この女は惡靈を交通してゐる。それ故、魔法使である。第二に、この女は男の服裝をしてゐる、それは不體裁であり、自然に

反するものであり、憎むべきものであります。我々が眞心を盡して反對し、懇願したにも拘らず、この女は聖餐(サクラメント)の時でさへそれを改めようとはしないのです。

ジヨウン　聖キヤサリン樣が惡靈なのですか。聖マアガリット樣も、天使長ミカエル樣も。

クウルセル　お前に現はれた精靈が天使長であるのがどうして分るのだ。裸の姿でお前のところへ現はれはしなかつたかい。

ジヨウン　神樣は天使長に着物をきせるだけのお力がないとでも、あんたは思ふんですか。

陪席判事達は、その冗談がクウルセル向けて言はれたものであるだけに、特にくすくす笑はずにはゐられない。

ラドヴニュ　うまい返答だ、ジヨウン。

宗教裁判官　實際、結果から見たらうまい返答だと言つてよからう。然し、惡靈は、若い娘のところへ姿を現はして、天國から來た使者であると自分を思はせようとする計畫がある場合に、娘を憤慨させるやうな身裝をして來る程馬鹿ぢやあるまい。ところで、ジヨウン、教會はお前に命令するが、その幻はお前の魂を地獄へ墮さうとする魔物なのだ。お前は、教會のこの

教をお受けするかどうだ。
ジョウン　あたしは神様のお使をお受けするわ。教會の忠實な信者なら、そのお使を拒む事が出來るでせうか。
コオシヨン　邪惡な女だな。もう一度お前に訊くが、お前は自分で何を言つてゐるか分つてゐるのか。
宗教裁判官　あなたは、この女の魂を救はうとして、惡魔と無益な取つ組み合をしてゐられるのだ。この女は救はれはしないでせう。さて今度は、男の服裝をしてゐる件について取調べよう。最後に訊くが、お前はその恥知らずな衣裳を脱いで、少しは女らしい著物を著ようとはしないのか。
ジョウン　厭です。
デスチエ　（飛び上つて）違反の罪です、閣下。
ジョウン　（當惑して）でも、あたし兵隊のなりをしなくちやいけないつて、あたしのお告が仰しやるんですもの。

ラドヴニュ　これこれ、ジョウン。それが、お前のお告が惡靈の聲なのを證據立ててゐるではないか。神樣の天使がお前にそんな恥知らずな忠告をお與へになつたと言つたつて、立派に理屈が立つと思ふか。
ジョウン　あら、あたしさう思ふわ。だつて、これ以上分り切つた考があるでせうか。あたしは、兵隊の中で暮してゐる一人の兵隊でした。今は兵隊で看視されてゐる罪人です。若しあたし、女のなりをしてゐなかつたら、みんなはあたしを女だと思ふでせう。さうなつたら、あたしはどうなるでせう。あたしが兵隊のなりをしてゐれば、みんなはあたしを兵隊だと思ふわ。さうすれば、あたしは家で兄弟達と一しよに暮してゐるやうに、兵隊達と暮してゆく事が出來るんです。だから、聖キャサリン樣が、あの方のお許がある迄あたし女の着物を着ちやいけないつて仰しやるのです。
クウルセル　何時お許があるのだ。
ジョウン　あんた方があたしをイギリス兵の手から取り戻して下さる時よ。あたし教會に身を委せてゐるべきで、夜も晝もウオリク伯爵の四人の兵隊と一しよにゐちやいけないんだつて、

さう言つたぢやないの。あたしがペチコオトを着ながらあの連中と一しよに暮してゐるのが、お望みなんですか。

ラドヴニユ　閣下、この女の言ふ事は、ひどく間違つてゐて、戰慄せざるを得ないものであるのは、神も御存知です。然し、この女の言葉には、單純な田舍娘の迷はされ易い、俗人の思慮分別が僅かばかりあるにはあります。

ジヨウン　あんた方は法廷やお城では至つて單純ですが、あたし達が村でそんなに單純だつた日には、あんたのパンをつくる小麥も出來なくなるでせう。

コオシヨン　君はこの女を救はうと努力してゐるのに、こんな挨拶をされるんだからな、ブラザア、マルチン。

ラドヴニユ　ジヨウン、我々はみんなお前を救はうとしてゐるんだ。僧正閣下もお前を救はうとしてゐられる。宗教裁判官閣下にしろ、お前がこの方の娘だつたつて、こんなにして下さりはしまいと思へる位だ。而も、お前と來ちや、恐ろしく傲慢で自惚が強くて、目が見えないのだ。

ジヨウン　何故そんな事を仰しやるの。あたし、なんにも間違つた事は言やしないわ。あたしにはどうも譯が分らないわ。

宗教裁判官　聖アサネサスもその信仰個條に、理解する事能はざるものは罰せられてゐるのだと書かれてゐる。單純であるだけでは十分ではない。單純な人々が善と呼ぶものでさへ十分ではない。心の暗い者の單純さは、獸の單純さと異るところがないのだ。

ジヨウン　でも、獸の單純さの中には、立派な智慧があるわ。そして、時によると、學者の智慧の中に、とんでもない馬鹿げたところがあるわ。

ラドヴニユ　それは分つてゐる、ジヨウン。我々はお前が考へる程馬鹿ではない。さあ、我々にそんな出過ぎた返答する誘惑に反抗するやうにしなさい。お前は後に立つてゐる男が見えないのか。(死刑執行人を指さす。)

ジヨウン　(振向いてその男を見ながら)拷問をかける人なの。でも、僧正さんは、あたし拷問にかけられなくともいいつて仰しやつたわ。

ラドヴニユ　お前は罪に問はれるに必要なことは、何もかも白狀したんだから、拷問にかけら

れなくともいいさ。この人は拷問を行ふ役ばかりでなく、死刑を執行する役なのだ。死刑執行人、この娘にわたしの問に對する答を見せてやれ。今日、異端を火焙りにする用意は出來てゐるか。

死刑執行人　はい。

ラドヴニュ　火焙の柱の用意はいいか。

死刑執行人　はい、用意は出來てをります。市場のところに。イギリス兵が柱をあんまり高くこさへたので、わたくしが女の側へ近寄つて、最後を和らげてやる事が出來ません。死に際はさぞ苦しい事でせう。

ジョウン　（恐れをのゝいて）でも、今あたしを燒殺さうと言ふんぢやないでせうね。

宗教裁判官　お前は、とうとそれに氣がついたな。

ラドヴニュ　八百のイギリス兵が、破門の宣告が判事達の唇からもれるや否や、お前を市場へ連れてゆかうと持ち構えてゐる。お前には、さういふ運命が今數秒のうちに迫つてゐるのだ。

ジョウン　（救を求めて絶望的にまはりを見廻し）まあ、どうしよう。

ラドヴニュ　絶望しないでもいゝよ、ジョウン。教會は慈悲深い。お前は自分を救ふことが出來るのだ。

ジョウン　（希望に充ちて）さうだわ。あたしのお告では、あたし決して火焙りになりはしないつて約束だつたわ。聖キャサリン樣は、あたしに大膽にやれつて仰しやつたわ。

コオション　これ、お前は全く氣が狂つてゐるのか。お前の耳にした聲がお前を欺いたのに、まだ氣がつかないのか。

ジョウン　いいえ、そんなことがあらう筈がないわ。

コオション　あらう筈がない！　お前はその聲のお陰で、すぐに破門になつて、あすこにお前を待つてゐる火焙りの柱へと連れて行かれるぢやないか。

ラドヴニュ　（その點を強く論じ詰めて）お前がコンピエヌで捕虜になつて以來、その聲が唯の一度でもお前に約束を果したことがあるのか。悪魔がお前を裏切つたのだ。教會は兩手をひろげてお前を迎へてゐるぢやないか。

ジョウン　（がつかりして）あゝ、さうだ、その通りだわ。あたしの聲があたしを瞞したんだ。

あたしは惡魔に嘲弄されてゐたんだ。あたしの信仰は破れた。あたしは、やり通し、やり通して進んで來た。でも火の中まで躍び込むのは馬鹿だけだわ。あたしに正しい分別を與へて下さつた神樣が、こんなことをあたしにさせようとなさる筈はない。

ラドヴニユ　やあ、これは有難い。神樣は最後の瀨戶際でお前を救つて下さつたぞ！（彼は書記役の卓の空席へ驅け寄つて、一葉の紙をひつたくり、熱心に何か書き始める。）

コオシヨン　あゝめん！

ジヨウン　あたし、どうすればいゝの。

コオシヨン　お前は、自分の異端を取消す誓書に署名をしなきやならない。

ジヨウン　署名つて？　あたしの名前を書くことなんでせう。あたし、書けやしないわ。

コオシヨン　お前はこれ迄澤山の手紙に署名してゐるぢやないか。

ジヨウン　えゝ。でも、誰かがあたしの手をもつて、ペンを運ばしてくれたのです。あたし、自分の符號なら書けるわ。

牧師　（次第に驚きと怒の念を增しながら傾聽してゐたが）閣下、あなたはこの女を我々から逃がさ

うとするおつもりですか。

宗教裁判官　法は曲げる譯にはわかない、ストガンバア君。あなたも法は御存知の筈だ。

牧師　（憤怒のあまり紫色になつて立上り）フランス人には信義のないのが分つてゐる。（騷擾、彼はそれを怒鳴り伏せる）ウインチスタアの大僧正がこれを聞かれたら、何と言はれるか分つてゐる、ウオリク伯爵は、諸君の裏切りを知られたら、何をされるか分つてゐる。門前には八百の兵士が控えてゐて、諸君が何と頑張らうと、この憎むべき魔法使を燒殺さずにはおかないのだ。

陪席判事達　（その間に）何だと！　何と言つたのか。我々を裏切りだと責めてゐるのだ。もう我慢がならない。フランス人には信義がないと！　聞いたか、君。實に手のつけやうのない奴だ。あれは誰だ。イギリスの牧師つてみんなあんな風なのか。屹度、氣が狂つてゐるか、醉つぱらつてるんだ。等、等。

宗教裁判官　（立上つて）靜かに、諸君、靜かに願ひます。ストガンバア君、あなたの神聖な役目を、あなたの身分、この場所柄を考へて頂きたい。わたしが命令します。お坐りなさい。

牧師　（頑固に兩腕を組みながら、顏を痙攣するやうに動かして）わたしは斷じて坐りません。

コオション　宗教裁判官殿、この人は以前にも、わたしを面と向つて裏切者だと言つた事があるのです。

牧師　あなたはその通り裏切者だ。諸君は一人殘らず裏切者だ。諸君は、この裁判の間中、この忌々しい魔法使に膝を屈して、どうぞ異端を取消してくれと嘆願してゐるだけではないか。

宗教裁判官　（落着き拂つて席に坐り）　坐るのが厭なら、立つてゐられるがいゝ。それだけの事だ。

牧師　わたしは斷じて立つてゐるのは厭です。（椅子へどつかりと身を投げる。）

ラドヴニュ　（手に書面を持つて立上つて）閣下、こゝに形式に從つて、娘に署名させる取消文をつくりました。

コオション　讀んで聞かせてやりなさい。

ジョウン　構はないわ。あたし署名しませう。

宗教裁判官　これ、お前は何に署名をするのか、自分で知らないでどうするのだ。讀んでおやりなさい、ブラザア・マルチン。さあ、諸君、お靜に願ひます。

ラドヴニュ　（靜かに讀み上げる）「わたくし、ジョウンは、普通には娘と呼ばれ、哀れな罪人でありますが、次の個條の重大な罪を犯した事を、此處に告白致します。わたくしは、神や、天使達、聖者達から啓示を受けた如くに裝ひ、それは魔物の誘惑であると言ふ教會の警告を頑固にも退けたものであります。わたくしは、聖書及び教會の聖典に逆つて、恥知らずな服裝をして、憎むべき不敬をなしたものであります。その上、男風に髮を切り、更に、わたくし女の身をとくに天國へ迎へられるために定められた一切の義務に逆つて、劍をとり、あまつさへ人間の血を流し、お互に殺し合ふやうに煽動し、惡靈を呼び寄せて人々を欺き、頑固に、且つ不敬にも、これ等の罪を至上至尊の神に負はせたのであります。わたくしは、謀叛煽動の罪、偶像崇拜の罪、不從順の罪、傲慢の罪、異端の罪を告白致します。わたくしは今、此等一切の罪を投棄て、退け、別を告げて、わたくしをして、眞理と我等の主とへ連れ戻し下されたあなた方博士達や僧正達に、ひれ伏して感謝致すものであります。そして、かゝる過を再び犯すことなく、我等の神聖なる教會と信仰を共にし、我等の神聖なる父、羅馬法王に服從するものであります。わたくしは、此等一切を、至上なる神と福音書に誓を立てゝ、その證據として、この取

消書に名前を署名するのであります。」
宗教裁判官　どうだ、分つたかね、ジョウン。
ジョウン　え丶、よく分ります。
宗教裁判官　では、それに間違はないか。
ジョウン　多分間違はないでせう。若し間違つてゐるなら、あたしを燒く火焙りの火が、市場に用意されはしないでせう。
ラドヴニュ　（ペンと一冊の本を取上げて、彼女が再び粗忽な振舞をするのを恐れて、急いで彼女に近付いて）さあ、わたしが手をもつてあげるから、ペンをおとり。（ジョウンはペンを取る。二人は本を机の代りにして書き始める）ジ・ア・ン・ヌ。さあよし。今度は自分で符號をお書き。
ジョウン　（符號を書き、ペンを彼に返し、自分の心身に抗ふ魂の反抗に苦しみながら）さあ、この通り！
ラドヴニュ　（ペンを卓の上に返し、コオションに取消書を恭々しく手渡して）神は讃むべきかな、兄弟達、仔羊は羊の群に歸り、羊飼は九十九人の正しい者よりも、この一人を悦んでゐられま

す。（席へ歸る。）
宗教裁判官　（その書面をコオションから受取つて）お前は危く受けようとした破門の危險を、この行によつて脱れた事を、我々は宣言する。（書面を卓の方へ投げやる）
ジョウン　どうも有難う。
宗教裁判官　然し、お前は、神と神聖な教會に對して、僭越この上なき罪を犯したが故に、お前が一人でよく考へてその過を悔い改め、再びかゝる過に陷るあらゆる誘惑から身を防ぐために、我々は此處に、お前の魂の利益として、且つは、お前の罪を拭ひ去つて、終には汚れなき身として惠みの玉座へ連れ行くための苦行として、お前を罰して、悲しみのパンを食ひ、苦しみの水を飲んで、この世の生涯の果てるまで永久に牢獄の身となるべき事を申渡すぞ。
ジョウン　（吃驚仰天して、激怒して立上つて）永久の牢獄ですつて！　では、あたしは放免されるのではないんですか。
ラドヴニュ　（少し驚いて）なに、放免だと、お前はそのやうな邪惡な事を行つておきながら、お前は何を夢見てゐるんだ。

ジョウン　その書きものを、あたしに下さい。(卓のところへ突進み、書面をひつたくつて、粉々に切裂いて) 火焙りの火を焚いて下さい。穴の中の鼠のやうな生涯はおろか、火焙りなんぞあたしが恐れると思ふのですか。あたしのお告は正しかつた。

ラドヴニュ　これ、ジョウン！　これ、ジョウン！

ジョウン　さうだ。あたしのお告によれば、お前さん達は馬鹿だ。(この言葉で一同烈しく怒る) そして、お前さん達の立派な言葉に感心したり、お前さん達の情に縋つてはならないのだ。あたしの命を助けてやると約束しておきながら、お前さん達は嘘をついたんだ。(憤慨した叫聲) お前さん達は、石のやうに冷たくなつてさへゐなきや、命があるものと思つてゐるんだ。あたしの怖れるのは、パンや水ではない。あたしはパンで生きてゐる。それ以上パンを下さいと何時言ひました。水も綺麗な水なら、飲むのは何も辛くはない。あたしにとつちや、パンが悲しみを與へたり、水が苦しみを與へたりしはしない。でも、空の光や、野や花の姿を、あたしの眼から遮つたり、あたしの足を鎖で繫いで、もう二度と兵隊と一しよに馬に乗つたり、丘に登つたりする事が出來なくしたり、腐つた濕つぽい暗闇を吸はせて、お前さん達の邪まな心や間拔

けさが神様を憎むやうにとあたしを誘ふ時に、あたしを神様へと引戻してくれるあらゆるものを遠ざけるなら、それは、聖書にある七度熱する窯よりは尚悪いのだ。あたし、軍馬がなくたつて構はない。著物の裾を引摺つて歩くのも我慢する。軍旗や喇叭や騎士や兵士があたしの傍を通り過ぎて、他の女達と同じやうにあたしを後へ殘して行つても辛抱するわ。ただあたしは梢を吹き渡る風の音、日の光に囀る雲雀の聲、氣持のいゝ霜空を通して叫ぶ仔羊の鳴聲、風に漂ひながら、天使の聲を傳へてくれる聖い聖い教會の鐘の音、それが今迄通りに聞えさへすれば、あたし辛くはないわ。でも、それがなければ、あたしは生きてはゐられない。そして、お前さん達が、あたしから、いゝえ、どんな人間からでも、それを奪ひ取らうとしてゐるところを見ると、お前さん達の考は悪魔のもので、あたしの考が神様のものなのがよく分るわ。

陪席判事達　(激しい動搖を起して) 神を瀆すものだ、不敬だ！　あの女は悪魔に魅せられてゐるのだ。我々の考が悪魔のものだと。そして、この女の考が神のものだと。不埒千萬だ。悪魔が我々の間にゐるのだ。等、等。

デスチエ　(騷ぎを壓する位の叫聲をはり上げて) この女は、異端へ逆戻りしたのだ。強情で、濟度

し難い、我々の示した慈悲を受ける値打の全然ない奴だ。わたしはこいつのために破門を要求する。

牧師　（死刑執行人に）おい、火を焚け。この女を火焙りの柱へ連れてゆけ。

死刑執行人とその助手達は、中庭を通つて急ぎ出てゆく。

ラドヴニユ　お前は邪惡な女だな。お前の考が神樣のものなら、神樣はお前を救はないでおかれる譯があらうか。

ジヨウン　神樣の遣り方は、お前さん達の遣り方とは違ふのだ。あたしがこの火を通つて神樣の御胸（み）にゆくのを、神樣はお望みになるのだ。何故なら、あたしは神の子だ、お前さん達と交つて生きて行かうにも、お前さん達にはその資格がないのだ。これが、あたしの遺してゆく最後の言葉です。

兵士達は彼女を捕へる。

コオシヨン　（立上つて）待て。

兵士達は手を控えて待つ。死のやうな沈默。コオシヨンは宗教裁判官の方へ振向いて、訊ねるやう

な視線を送る。宗教裁判官は承認するやうに叩頭く。二人は嚴かに立上つて、次の宣告を應答するやうに抑揚をつけて言ふ。

コオシヨン　我々は宣言す、汝は異端に逆戻りせしものにして。

宗教裁判官　教會の結合より投出され。

コオシヨン　教會の肉體より切離され。

宗教裁判官　異端の癩病に冒されたる。

コオシヨン　魔王（セイタン）の一配下である。

宗教裁判官　汝を破門すべき事を、我々は宣言す。

コオシヨン　而して今や、我々は、汝を追放し汝を隔離し、俗界の權力に汝を投げ棄て。

宗教裁判官　その俗界の權力に勸告するに、死刑に處し、手肢を切斷するに當つては、汝に對する判決を緩和せんことを以てし。（席に復す。）

コオシヨン　若し汝に、悔恨の眞のしるしの幾分なりとも現はるゝ時には、ブラザア・マルチンをして汝の贖罪の聖典を行ふことを許されん事を以てするのである。

牧師　この魔法使を火に投げ込め。（彼女の方へ突進み、兵士達を助けて彼女を外へ突き出す。）

ジョウンは中庭を通つて連れて行かれる。陪席判事達はごやごやと立上つて、兵士の後に續く。ただラドヴニュは兩手で顔を掩うてゐる。

コオション　（坐らうとして、又立上つて）いや、いや、これは法則に外れてゐる。俗界の權力の代表者が、我々からあの娘を受取るために此處へ來るのが至當だ。

宗教裁判官　（同じく、又立上つて）あいつと來ちや、仕末に終へない馬鹿だ。

コオション　ブラザア・マルチン、一つ行つて、萬事法則通りに行はれてゐるか見て來て下さい。

ラドヴニュ　あの娘の側にゐるのがわたしの役目ですもの、閣下。ところで、あなたはあなた御自身の權威をお示しにならなきやいけません。（急いで出てゆく。）

コオション　あいつ等イギリス人のやうな人間はあつたもんぢやない。あの娘をすぐに火中に投ずるだらう。ああ、あれを！

彼は中庭を指さす。そこには今しも輝き搖れる炎が、五月の日光を赤く染めてゐる。僧正と宗教裁判官とが、法廷に殘つてゐるだけである。

コオション　（行きかけて）我々はあれを止めなくちやならない。

宗教裁判官　（落著いた態度で）さうです、然し、さうお急ぎにならなくとも。

コオション　（立止つて）然し、一刻の猶容も出來ない。

宗教裁判官　我々は十分法則に從つて裁判したのです。若しイギリス兵が勝手に間違つた振舞をしたとて、それを正してやるのは我々の闘するところではない。遣り方に落度があれば、他日何かの役に立つかも知れませんよ。それに、火焙りが早く濟めば濟む程、あの哀れな娘にとつては仕合せなのです。

コオション　（がつかりとして）それは仰しやる通りです。然し、我々はこの恐ろしい事件を最後まで見屆けて世話をしてやるべきだと思ひます。

宗教裁判官　なに、こんな事にはすぐ慣れて來ますよ。習慣が萬事です。わたしは火焙りには慣れてゐる。なに、すぐに濟みますよ。然し、教會と法律のこの二つの强い力に挾まれて碎かれてゆく若い罪のない者を見るのは、恐ろしい事だ。

コオシヨン　あなたは、あの女に罪がないと言はれるのですか。

宗教裁判官　いや、全く罪がない。あの娘は、教會と法律について何を知つてゐるでせうか。あの娘は、我々の言つた一言だつて理解しはしないのだ。苦しむ者は無智なものです。さあ、出掛けませう、でないと最後に遲れますよ。

コオシヨン　（一しよに行きながら）遲れても、わたしは殘念には思ひません。わたしはどうもあなたのやうに慣れてはゐないもんですから。

二人は出てゆかうとすると、ウオリクがはひつて來る。兩方出會ふ。

ウオソク　ああ、これはお邪魔をしました。わたしは、もうすつかり濟んだ事と思つたものですから。（退出しようとするふりをする。）

コオシヨン　いや、お歸りになるには及びません。裁判はすつかり濟んだのです。

宗教裁判官　死刑執行は我々の任務ではありません。然し、最後を見てやりたいと思ひますので。では、一寸失禮――（挨拶して、中庭から出てゆく。）

コオシヨン　あなたの兵士達は法則を守つてゐるかどうか、いささか疑はしい點があるのですが、閣下。

ウオリク　あなたの權威がこの町に行はれてゐるかどうかいささか疑はしい點があるとの噂です。この町はあなたの管轄敎區ではありません。然し、あなたがその返答をなさるなら、わたしもあなたに返答しませう。

コオシヨン　我々が返答しなければならないのは、神に對してです。さようなら、閣下。

ウオリク　さようなら、閣下。

二人は敵意を現はして一瞬間睨み合ふ。それから、コオシヨンは宗敎裁判官の後を追うて出てゆく。ウオリクはあたりを見廻す。自分一人切りなのを知つて、從者を呼ぶ。

ウオリク　おおい、供のものは誰かゐないか！（沈默）おおい、おいつたら！（沈默）おおい、ブリアン、小僧、何處にゐるのだ。（沈默）番兵つ！（沈默）みんな火焙りを見に出かけあがつたなあ、あの子供さへ。

この沈默が、誰かの狂氣のやうに咆え啜泣く聲で破れる。

ウオリク　何だ、一體全體――

牧師が、氣の狂つた者のやうに、中庭から蹌踉きながらはひつて來る。彼の顔には涙が流れ、ウオリクが耳にしたこの哀れつぽい聲を立ててゐるのである。彼は四人の腰掛に跪き、心を裂くやうな啜泣きの聲を上げて、その上にうつぶす。

ウオリク　（彼の方へ行き、彼の肩を叩いて）え、どうしたんだ、ジョン君。一體どうしたんだ。

牧師　（彼の手を掴んで）閣下、閣下、後生です、わたしの邪しまな罪深い魂のために祈つて下さい。

ウオリク　（彼を宥めながら）いいとも、いいとも。勿論、祈つて上げるよ。まあ、落着いて、靜かに――

牧師　（慘々しく泣きながら）わたしは惡人ぢやありません、閣下。

ウオリク　さうだとも、さうだとも。勿論君は惡人ぢやない。

牧師　わたしは何も惡い事を考へてゐたのではない。こんなにならうとは思はなかつた。

ウオリク　（硬くなつて）ああ！　ぢや、君はあれを見たんだね。

牧師　わたしは自分のしてゐる事が分らなかつた。わたしは怒りつぽい馬鹿です。そのためにわたしは永遠に地獄へ墮ちるでせう。

ウオリク　馬鹿な！　どうも、ひどく苦しんでゐるなあ。然し、ありや君のした事ぢやないよ。

牧師　（嘆き悲しんで）わたしがみんなにさうさせたのです。こんな事と分つてゐたら、わたしは兵士の手からあの女を奪つてゐたでせう。貴樣は知らないのだ。貴樣には分らなかつたのだ。知らないで喋るのは、全く譯のないこつた。貴樣は言葉で自分を氣違ひにしたんだ。貴樣は、自分の怒りつぽい炎の燃え立つ地獄へ油をふりかけるのを、立派な事だと思ふから、自分で自分を罰するのだ。然し、貴樣にそれがはつきりして來ると、自分のやつた事が分ると、貴樣の眼は潰れ、息が詰り、心の臓が破けて、それから――それから――　（跪いて）おゝ、神樣、この幻をわたしから取去つて下さい。おゝ、クリスト、わたしを燒き盡すこの炎から救つて下さい。おゝ、ジイザス！　あの女は御身の胸にゐるのです。而も、俺は永遠に地獄にゐるのだ。

ウオリク　（すぐさま彼を引き立たせて）さあ、さあ。君はもつと落着かなくちやいけない。そんな事をしてゐちや、町中の噂にされないとも限らないぜ。（あんまり優しいとは言へないやり方で、彼を卓の傍の椅子へ押しつけて）君はこんな事を見るだけの勇氣がないんなら、何故、わしが

やつたやうにして、あの場を外してゐないんだ。

牧師　（當惑し、音無しく）あの娘は十字架が欲しいと言つたのです。そこで兵隊の一人が、二本の棒切を組み合せて遣つたのだ。有難い、その兵士はイギリス人だつた。わたしにだつて、それ位の事は出來たかも知れない。然し、俺はしなかつた。俺は卑怯者だ、氣違ひ犬で、馬鹿だ。それなのに、あの兵士もイギリス人だつたのだ。

ウオリク　そいつあ馬鹿だ！　若し坊主共がその兵士を捕まへてゐりや、みんなはそいつをも火焙りにしてゐるぜ。

牧師　（痙攣で身を顫はして）あいつ等のうちには、あの娘を笑つた奴がゐるのだ。あいつ等はクリストを笑つてゐたんだらう。そいつあフランス人でしたよ、閣下。たしかにフランス人だつた。

ウオリク　しいつ。誰かが遣つて來る。さあ、落著き給へ。

ラドヴニユが、中庭を通つてウオリクの右手へ歸つて來る。僧正の十字架を持つてゐるが、それは敎會から取外したものである。彼は嚴肅な沈著な面持をしてゐる。

ウオリク　マルチン殿、もうすつかり濟んださうですね。

ラドヴニユ　（謎のやうに）さあ、何とも分りませんね、閣下。たつた今始まつたばかりかも知れません。

ウオリク　それはどういふ意味です、はつきり言へば。

ラドヴニユ　わたしはこの十字架を敎會から取出して、あの娘が最後まで見てゐられるやうにしたのです。あの娘が胸に置いてゐるのは、たつた二本の棒切に過ぎませんでしたからね。燃え立つ炎が我々のまはりへ近づいて來た時、わたしがジョウンの前へ十字架を捧げてゐて、わたし達が燒殺されさうなのを見てとつて、あの娘は、危いから下りてゆけと、わたしに注意してくれたのです。このやうな刹那にも他人の危險を考へる事の出來る娘は、惡魔に魅せられた人間ぢやありませんよ。愈々わたしが余儀なく娘の眼の前から十字架を取り去ると、娘は天を仰ぎ見ました。そして、その大空には何の影も見えなかつたとは、わたしは信じません。あの娘の救世主が、優しさ限りのない輝に身を包まれながら、姿をお見せになつたのを確く信じます。ジョウンは主のみ名を呼びながら死んだのです。これは、あの娘にとつて最後ではなくて、

最初だつたのです。

ウオリク　どうもこいつあ、みんなに惡い影響を與へはしないかしら。

ラドヴニユ　もう影響を與へられた者もありますよ。わたしは笑聲を聞きました。かう言つては失禮ですが、それはイギリス人の笑聲であつてくれるやうにと、わたしは希望し、又、さう信じます。

牧師　（狂氣のやうになつて立上つて）いや、さうではない。あすこにゐたイギリス人で、祖國の名譽を汚したものはたつた一人しかないのだ。それは、このストガンバアと言ふ氣違ひ犬だ。（鋭い叫聲を立てながら、荒々しく飛び出す）そいつを拷問にかけろ。火焙りにしてやれ。俺はあの娘の灰の中へ行つて祈らう。俺はまさしくユダだ。首をくゝつて死なう。

ウオリク　さあ、早く、マルチン殿。奴の後を追つかけて下さい。あいつ、自分の身に何か間違を仕出かすかもしれない。さあ、早く、後を追つて。

ウオリクがせき立てるので、ラドヴニユは急ぎ出てゆく。死刑執行人が、判事達の席の後の戸からはひつて來る。ウオリクは戻つて來て、彼とばつたり顔を合す。

ウオリク　やあ、奴さん。誰だい、君は。

死刑執行人　（威儀正しく）わたしは、奴なんて呼ばれる人間ぢやないよ、閣下。わしはルアンの死刑執行役の頭だ。死刑つて奴は、特別の技術のいる祕法ですぜ。閣下、わたしは、あなたの命令通りにやつゝけたのを知らせに參つたのです。

ウオリク　やあ、これは失禮、死刑執行長君。お前さんは、賣物にする遺物がなくて損をするだらうが、そいつあわしが一ついいやうに取計つてやらう。ところで、約束だつた筈だが、どうだい、何にも殘つてちやゐないだらうな、骨一木も、爪一枚も、髮の毛一條も殘つちやゐまいな。

死刑執行人　あの女の心の臟だけが燃えませんので。然し、殘つたものは一切、河の底へどんぶりでさあ。もうこれつきり、あいつの噂もお終ひでさあ。

ウオリク　（顔を歪めて笑ひながら、ラドヴニユの言つた事を考へながら）もうこれでお終ひだ？ふん！　さうかしら！

エピロオグ

一四五六年の六月の、吹くかと思ふと歇み、歇むかと思ふと吹く休みなき風の夜。熱きつくやうな暑い數日後の、夏の稻妻しきりに閃く。フランス國王シャルル七世、以前のジョウンの時の皇太子、今は「戰勝王のシャルル」、齢五十一歳になつてゐるが、離宮の一つで、寢臺に横たはつてゐる。寢臺は、二段の段のある高座の上に高くこさへられ、部屋の片側に置かれてあつて、正面中央にある高い鋭尖窓を遮らないやうになつてゐる。寢臺の天蓋には刺繍をした王家の紋章がついてゐる。この天蓋及び大きい數本の柱を除けば、夜具及び一枚のカアテンのある廣い一種のソオフアと大して異るところがない。であるから、寢臺の中が脚元からすつかり見える。

シャルルは眠つてはゐない。寢床の中で讀書してゐる。と云ふより寧ろ、膝を重ねて讀書机の代りにして、フウケのボツカチョの繪を眺めてゐる。彼の左手、ベツドの側には小さな卓。それには聖母の肖像があつて、色つきの蠟燭の光で照らされてゐる。壁には、天井から床へと、繪を描いたカアテンが下つてゐて、時々吹入る風に動いてゐる。最初それを見ると、これ等のカアカンの繪には黄色と赤が強くて、襞が風をふくむ度に、何となく炎のやうな感じを與へる。

シャルルの左手に戸口が一つ、然し、それは彼と反對側の、彼からは一番遠くの隅つこ近くにある。

大きながらがらの器物の、精巧な意匠で派手な彩色を施したのが、寢床の中の手の下にある。シャルルはばたりと本を閉ぢて、側へ押し遣り、がらがらを掴んで、力をこめて振つて、耳を聾するばかりの音を立てる。二十五歳老いたラドヴニユがはひつて來る。異様な硬ばつた樣子で、依然としてルアンの時の十字架を持つてゐる。シャルルは、明らかに彼が來ようなどとは思つてゐなかつたと見えて、ベツトから戸口の反對側へ飛び下りる。遠くで時計が半時間を打つ音が微かに響く。

シャルル　誰だ、お前は。寢室掛の役人は何處にゐるのだ。君は何の用があるんだね。

ラドヴニユ　（嚴かに）わたくしは、あなたに大きな悦のお報を持つて參りました。まあ王樣、お悦び下さい。あなたの血から濁りが取り除かれ、あなたの冠から穢が拭き去られたのです。正義は、長い間姿を隱してゐましたが、やつと勝利を得ました。

シャルル　君は何の話をしてゐるんだ。君は誰だね。

ラドヴニユ　わたしはブラザア・マルチンです。

シャルル　お見それして失禮だが、ブラザア・マルチンつて誰でしたつけ。

ラドヴニユ　わたしは、あの娘が火焙りで滅んだ時に、この十字架を捧げてゐた男です。あれ

から、二十五年の年月が過ぎ去りました。殆んど一萬日の日です。その月日の間、わたしは、あの神の娘が天國で正義を認められたやうに、この世でも正義を認められるやうにと神樣にお祈りせぬ日は一日もありませんでした。

シャルル　（安心して、寢臺の脚元に坐つて）あゝ、さうか、今やつと思ひ出した。わしは君の噂を聞いてゐる。君はあの娘にひどく熱中してゐるね。で、裁判には出席したのか。

ラドヴニュ　わたしは證據を申立てました。

シャルル　もう濟んだのか。

ラドヴニュ　もう濟みました。

シャルル　滿足にいつたか。

ラドヴニュ　神樣のなさり方と言ふものは大層奇妙なものですね。

シャルル　どうして？

ラドヴニュ　聖者をば異端であり魔法使であるとして火焙りの罪に問ふたあの時の裁判では、眞理は語られ、法律は擁護され、一切の慣例を破つて迄も慈悲が施されました。最後に虚言に

充ちた宣告と情容赦もない火焙りとの恐ろしい間違を犯した外、何等の不正も行はれなかつたのでした。ところが、今度の裁判では——わたしは今し方其處から歸つて來たのですが——恥知らずな僞りの證言や、お上品ぶつた墮落や、己の智慧に從つて義務を果した死人に對する中傷や、論點に對する卑怯な遁げ口上や、土百姓の子だつて瞞まされはしないやうな馬鹿げた話で拵へ上げた申立で充ちてゐるのです。而も、正義に對するこの侮辱、教會へのこの中傷讒謗、噓と馬鹿々々しさのこの底拔け騷から、眞理が、山の頂きに輝く正午の太陽へと立登つたのです。無罪の白い衣が、燃え立つ火焙りの汚れから清められ、貴い生命は神聖になり、火焙りを通して生きのびた眞實の心は神のものとなり、偉大な噓は永遠に口を緘せられ、偉大な不正は萬人の前で正されたのです。

シャルル　まあ、君、わしが魔女や異端の徒の力で位に登つたと言はれないで濟むなら、どう奸策が行はれたにしろ、わしはわい／＼騷ぎ立てはしないよ。ジョウンだつて、結局、何もかも正當になつたのなら、何もとやかく言ひやしないだらう。わしはあの娘を知つてゐるよ。ところで、あの女の名譽恢復はうまく行つたかね。わしはこれは下らない事として取扱ふべきも

のではないと、かなりはつきり言つてゐたんだがね。

ラドヴニユ　あの女の裁判官達は、墮落と、僞瞞と、詐欺と、惡意で充ちてゐたと言ふ事が、嚴かに宣言されました。四つの誤謬です。

シヤルル　まあ、誤謬の事なら構はないで置き給へ。あの女の裁判官達はもう死んでゐるのだ。

ラドヴニユ　あの娘に下された判決は、價値も効果もない、存在理由のないものとして、破棄され、無効にされ、滅却せられ、放擲されたのです。

シヤルル　結構。もう今では、誰もわしの卽位式にけちをつける事が出來ない譯だなあ。

ラドヴニユ　シヤルマアニユもデヴィド王も、これ以上神聖な卽位をしておいでにはなりませんよ。

シヤルル　（立上り）素敵だ。それがわしにとつてどんなに大事なことだか考へてみ給へ。

ラドヴニユ　わたしは、それはあの女にとつては實に大事なことだと思ひます。

シヤルル　そんな事はないよ、君。我々は誰一人、何があの女に大事だつたか知りやしないんだ。あの女は他の人間のやうぢやなかつたよ。あの女は何處へ行かうと、自分で自分の世話をしなくちやならなかつたんだ。何故つて、わしはあの女の世話をする事は出來やしないし、君はどう考ようと、君だつて出來やしないんだ。君はそれ程偉かないからなあ。然し、わしは、あの女のことでこれだけ言つとかう。若し君がもう一度あの女を生き返らす事が出來るとしても、あいつ等は現在はあの女を崇拜してゐるが、いくら崇拜してゐたつて、六ケ月とたゝないうちに又燒殺してしまふだらう。そして、君は相變らずその十字架を捧げる事だらう。だから、（十字を切つて）あの女を安らかに眠らせ給へ。まあ、君もわしも自分の事を氣にかけて、あの女の事は干涉しないこつたなあ。

ラドヴニユ　わたしがあの女の事に與るべきでもなく、あの女がわたしの事に與るべきでもないと、神樣が仰しやるでせうからね。（振返つて、來た時のやうに大股に出て行きながら、言ふ）もうこれ迄だ。わたしの行く道はお城の中を通つてやしない。わたしの話は王と一しよにするものでもないのだ。

シヤルル　（彼の後を追うて戶口のところへ行き、後から叫ぶ）君のうまく行くのを祈るよ、牧師君。（部屋の中央に戻り、そこで立止り、嘲笑するやうに獨言する）可笑しな奴だなあ。どうしては

ひり込んだのかな。召使どもは何處にゐるんだ。（苛立しさうに寢臺へ行き、がらがらを振る。一陣の風が開放された戸口からさつと吹き入つて、壁を激しく搖る。蠟燭が消える。彼は暗闇の中で呼ぶ。）おゝい！　誰か來て、窓を閉めてくれ。風が城中吹きまくつてるぢやないか。（稻妻がぱつと閃いて、鋭尖形の窓々を浮き出さす。それを背にして、シルエットをなした姿が見える）誰かゐるな。ありや誰だ。助けてくれ！　人殺しだ！（雷鳴。彼は寢床へ飛び込んで、夜具の下へ隱れる）

ジョウンの聲　靜かに、シャアリイ、靜かに。どうしてそんなに騷いでいらつしやるの。誰にも聞えやしないわ。あんたは眠つてゐるのよ。（彼女の姿は、青褪めた綠の光を浴びて寢臺の傍に幽かに見える。）

シャルル　（眼だけ出して）ジョウンかい！　君は幽靈なのかい、ジョウン。

ジョウン　そんなものにさへなれやしないわ。哀れな火焙りにされた娘が、幽靈になる事が出來るもんですか。あたしは、あんたが夢みていらつしやる夢に過ぎないのよ。（光は增して來る。彼は起上つたので、二人の姿ははつきり見える）まあ、お年をおとりになつたわね。

シャルル　あゝ、年をとつたよ。ほんとうにわしは眠つてゐるのか。

ジョウン　馬鹿げた本の上にうつ伏して眠りこんでゐるのよ。

シャルル　そいつあ可笑しいなあ。

ジョウン　あたしが死んでる方がよつほど可笑しいわ。さうでせう。

シャルル　お前、ほんとうに死んでるのか。

ジョウン　今迄に死んだ人と同じやうに死んでるわ。あたし、肉體から脱け出して來てゐるのよ。

シャルル　變だな。ひどくやられたんぢやなかつたかい。

ジョウン　ひどくやられたつて、何がさ。

シャルル　火焙りになつたんで。

ジョウン　あゝ、その事！　あたし、よくは思ひ出せないわ。初めのうちは覺えてゐたやうだつたが、暫くすると、すつかり何が何だか譯が分らなくなつてしまつたの。そして、肉體から自由になる迄は、すつかり正氣に歸らなかつたわ。でも、あんたは火を弄んでも、ひどい目に會はないなんて思つちやいけないわ。あれから、御機嫌は如何。

シャルル　あゝ、さう惡くはない。僕が實際軍隊を指揮して、幾度も戰爭に勝つたのを知つてるかい。濠の中へ飛び込んで、腰まで泥や血でまみれたもんだ。石をぶたれたり、熱い脂を雨のやうに注ぎかけられながら、梯子を登つたもんだ。君のやうにね。

ジヨウン　そんな事ないわ。あたし、結局あんたを男にしたでせうか、シヤアリイ。

シャルル　わしは今では戰勝王シャルルと呼ばれる身だ。お前が勇敢だつたから、わしも勇敢にならなければならなかつたのだ。アニエも少しはわしに勇氣をつけてくれた。

ジヨウン　アニエ！　アニエつて誰。

シャルル　アニエ・ソレルと言つて、わしが戀した女だよ。わしはあの女のことを時々夢に見る。わしはお前のことはまだ夢に見たことはないが。

ジヨウン　その人も死んでるの、あたしのやうに。

シャルル　ああ、死んだよ。でも、あいつは君のやうぢやなかつた。大層綺麗だつたよ。

ジヨウン　（心から笑つて）はつはつ！　あたしは美人ぢやなかつたわ。あたしは何時も粗野な女で、普通の兵隊さんだつた。あたし男だと言つていゝ位だつた。でも男でなくて殘念だわ。

男だつたら、あんなにあんた方みんなを困らせてゐやしなかつたでせう。でも、あたしの考は天國をさまよひ、神樣の榮光があたしを照してゐたのよ。だから、男だらうが女だらうが、あたしは、あんた方が下らない泥に頭をつつこんでゐる間は、あんた方を困らせてゐたでせう。さあ、あれからどんな事があつたか話して頂戴、あんた方賢明な方達が、あたしを灰の山にするだけで、それ以上何にも知らなかつたあの時分から。

シャルル　君の阿母（おふくろ）や兄弟達が、法廷を相手取つて、お前の裁判を遣り直すやうにと申出たよ。そこで、法廷は、お前を裁いた裁判官達は墮落と僞瞞と詐欺と惡意で充ちてゐたと言ふ宣言を下したのだ。

ジヨウン　そんな事ないわ。あの人達は、自分より勝れたものを火焙りにした氣の毒な馬鹿と同じやうに正直な人達で、あんな人は澤山ゐるものよ。

シャルル　お前に下された宣告は、破棄され、放擲され、無効になつたよ。効力のない、存在理由のない、價値も効果もないもんだと言ふんでね。

ジヨウン　でも、あたしの火焙りになつたのには何も變りはないわ。だつて、その人達はあた

しを火焙りにしないやうに出來るのですか。

シャルル　若しあの連中にそんな事が出來るなら、それをする前に二度も考へるだらうよ。だが、あいつ等の判決では、お前の永久の記念とお前の救のために、火焙りのあつたところへ美しい十字架を立てようと言ふ事になつたよ。

ジョウン　十字架を神聖にするのは記念と救でなくて、記念と救を神聖にするのが十字架です。（踵を返して、彼を置去りにして）あたしはその十字架を長く保存しよう。ルアンが何處にあつたか人々が忘れてしまふ頃、あたしは思ひ出されるだらう。

シャルル　ほら、君は相變らず自惚が強いな、以前とちつとも變りはない。君は、正義がとうと認められたのを、わしに一言位感謝してもいいと思ふよ。

コオション　（二人の間の窓に現はれて）嘘つき！

シャルル　有難う。

ジョウン　あら、ペテル・コオションぢやないの。御機嫌は如何、ペテル。あたしを火焙りにしてから、何か幸福なことがあつて？

コオション　いや、まるで駄目だ。わたしの審問するのは人間の正義だ。それは神の正義ではないのだ。

ジョウン　あら、まだ正義のことを考へてゐるの？　まあ、あたしがどんな正義を得たか御覧なさい。ところで、あんたはどうなつたの。生きてゐるの、死んでるの。

コオション　死んでゐる。ひどい汚名を蒙つた。奴等は墓場の向うまでもわたしを追跡したんだ。わたしの死骸は破門の宣告をうけた。奴等は死骸を掘し出して、賤しい溝へ投げ込んだのだ。

ジョウン　あんたの死んだ肉體は、鋤や溝を感じやしないでせう。あたしの生きた肉體が火焙りを感じるやうにはね。

コオション　然し、わたしに向つてなされた事は、正義を傷つけ、信仰を破壊し、教會の根底を覆すものである。もし無垢なるものが法律の名に於て殺戮せられ、その不正が心の清さを誹つて尙止む時がないなら、この堅い大地も、人間並びに精靈の足元で、謀叛をたくらむ大海のやうに搖れ動くのだ。

ジョウン　さうよ、さうよ、ペテル。人々があたしの事を思ひ出して、もつと良い人間になつてくれたらと思ふわ。若しあたしが火焙りになつてゐなきや、こんなによくはあたしを思ひ出してくれやしないでせう。

コオシヨン　わたしの事を思ひ出せばもつと悪い人間になるだらう。悪が善に、僞りが眞理に、殘酷が慈悲に、地獄が天國に打勝つたのを、わたしの姿に見るだらうから。ところが、みんなはお前の事を考へると、勇氣が湧き起つて來るだらう。わたしの事を考へると、勇氣が消え失せるだけだ。而も、神樣が見てゐて下さるのだ、わたしが正しかつたのを、わたしが慈悲深かつたのを、自分の信念に忠實だつたのを、わたしがなしたより他にやり樣がなかつたのを。

シャルル　（敷布から匍ひ出して、ベットの端へ王座へ坐るやうに坐る）さうだよ。大きな過を犯すのは、何時だつて君達のやうな良い人間にきまつてゐるのだ。わしを見給へ。わしは善王シャルルでも、賢王シャルルでも、猛王シャルルでもない。ジョウンの崇拜者達は、わしがジョウンを火焙りから救ひ出さなかつたので、弱王シャルルとさへ言ひ兼ねないのだ。然し、わしは

君達のうちの誰よりも、害になる事はしてゐない。君達頭を上に向けてる人間は、しよつちゆ世界をひつくり返さうとしてゐるのだ。然し、わしは世界をあるが儘に考へて、上にあるものは上に置くがいゝと言つてゐるのだ。そして、わしは地面にぴつたり鼻をつけてゐる譯さ。だから、君達に訊くが、フランスの王でもつといゝ事をしたつて者があるのか、或は自分の小つぽけな遣方で、もつといゝ人間になつたつて奴があるのか。

ジョウン　あんたは、ほんとうに、フランスの王者なの、シャアリイ。イギリス兵は追拂つたの。

デュノア　（ジョウンの左手の帳からはひつて來る。それと同時に蠟燭が自づと點れて、彼の鎧や陣羽織を陽氣に照す）僕は約束通りイギリス兵を追拂つたよ。

ジョウン　まあ、有難い。では、今では美しいフランスは天の領土となつたのだ。さあ、戰爭の模樣をすつかり話して頂戴、ジャック。あんたが軍隊を指揮したの。あんたは死ぬ迄神樣に仕へる隊長だつたの。

デュノア　僕はまだ死んでやしないよ。僕の體はシャトオダンの僕の寢床ですや／＼と眠つて

ゐる。然し、僕の精靈は、君の精靈が呼んだので、此處へ遣つて來たのだ。

ジョウン　ぢや、あんたはあたしの遣り方で戰爭したの、え、ジャック。身の代金の取引をする古い遣り方ではなく、乙女の遣り方で、命をまとにして、高潔謙譲な心で、惡意を避けて、神樣のしろしめすところ、フランスの自由とフランス人のことしか考へない遣り方でね。それがあたしの遣り方だつたでせう。

デユノア　その通りだ。その遣り方をすればとにかく勝つには勝てるのだ。然し、君の遣り方ばかりで勝つた譯ぢやないよ。だが、僕は君を偉いと思ふよ。僕は、今度の裁判で君を正當に取扱ふやうにと立派な手紙を書いたぜ。多分僕なら、坊主どもに君を火焙りにさせやしなかつたらう。だが、僕は戰爭で急しかつたんだ。それに火焙りなんて教會の仕事で、僕のする事ぢやなかつたからなあ。火焙りにされたつて、僕達二人には何でもないんだ、さうぢやないか。

コオシヨン　あゝ、僧侶を非難するんだね。然し、わたしは、稱讃や非難の外にゐるので、君に言ふが、世界を救ふものは、牧師でも兵隊でもなく、神とその聖者達なのだ。地上教會はこの娘を火焙りに處したが、この娘が燒殺される時でさへ、その炎は天上教會の輝の中で淸めら

れたのだ。

時計が四分の三時間を打つ。粗野な男性の聲が、卽興の一曲を怒鳴つてゐるのが聞える。

Rum tum trumpledum,

Bacon fat and rumpledum,

Old Saint mumpledum,

Pull his tail and stumpledum,

O my Ma-ry Anne!

悪黨然としたイギリス兵が一人、カアテンを通してはひつて來て、デユノアとジョウンの間へ行進

して來る。

デュノア　おい、君にそんな馬鹿げた唄を教へたのは、何處の悪黨のトルゥバドゥアだい。

兵士　トルゥバドゥアぢやないよ。俺達は行進する時自分でこさへたんだ。俺達は紳士方でもなきや、トルゥバドゥアの詩人でもない。音樂つて奴あ、まあ言つてみりや、人間の心からぢかに出てくるもんだ。ラム　タム　トラムプレダム、ベエコン　ファット　アンド　ラムプレダム、オルド　セント　マムプレダム、プル　ヒイズ　テエル　アンド　スタムプレダム、お分りでせうが、こいつには別に意味がないんです。然し、こいつを唄ふと行進の歩調がそろふつて譯でさあ。あなたの從卒であります、淑女紳士方。聖者をお招きになりしは、誰だい。

ジョウン　お前さん聖者なの。

兵士　さうさ、お孃さん、地獄からまつすぐに遣つて來た。

デュノア　聖者で、而も地獄から來たと！

兵士　さうであります、高潔な隊長殿。わたしは一日の休暇を頂いたのであります。毎年のことです。こいつあ、わたしが良い行を一つした特典であります。

コオション　悪黨め！　お前は長年の生涯のうちで、たつた一つの善行しかしなかつたのか。

兵士　いや、俺はそんな事は考へてゐなかつた。至つて當り前なことだつたんだ。ところが、そいつが登錄されたのさ。

シャルル　何をしたんだね。

兵士　なに、至つて詰らない事でさあ。わたしは――

ジョウン　（寢臺の方からぶら歩いて行つて、彼の話の腰を折る。そして、シャルルの傍へ腰をかけて）あの兵隊さんは、二本の棒切をゆわへて、火焙りにならうとする哀れな娘にそれを與へたのよ。

兵士　全くその通り。誰が君に話したんだい。

ジョウン　そんな事どうでもいゝぢやないの。お前さんはその娘に又會つても、その娘が分るだらうか。

兵士　分りつこないよ。娘つ子は大勢ゐるんだ。而も、どの娘さんもみんな、自分がこの世でたつた一人の娘ででもあるやうに、思ひ出して貰ひたがつてゐるんだからなあ。ところで、あ

の娘は飛つきり上等の女だと見えて、俺はあの娘のおかげで毎年休暇が一日貰へるんだ。だから、十二時がちんと鳴るまでは、俺は聖者樣なんだ。さて、何か御用はございませんか、御立派な殿樣方に美しい御婦人方。

シャルル　では、十二時過ぎると。

兵士　十二時過ぎると、あすこへ歸るんでさあ、おいらのやうな人間にはあすこより外に歸(け)えるところがねえんだから。

ジョウン　(立上つて) 地獄へ歸るつて？　あの娘に十字架を與へたお前さんが。

兵士　(自分の兵隊らしくない行爲を辯解しながら) だつて、あの娘が十字架を欲しと言つたんです。それに、あの娘はあいつ等のために火焙りになるところでしたからね。あの娘だつて、あいつ等と同じやうに十字架をもつ權利が十分あるぢやないか。あいつ等と來ちや、十字架は何十と有つてゐるんだもの。それに、娘のお葬式で、奴等の葬式ぢやねえんだ。俺のやつた事に何處に惡いところがあるんだ。

ジョウン　あら、あたしはお前さんのした事を惡いと言つてるんぢやないわ。あたし、お前さ

んの苦しんでゐるのを考へると我慢が出來ないのよ。

兵士　(快活に) なに大して苦しんでやしないよ。俺はもつと惡い事に慣れつこだつたんだからなあ。

シャルル　何。地獄より惡いと。

兵士　わつしはフランスの戰爭に十四年間も從軍してゐたのだ。地獄はそれに比べりやお祭みてえなもんさ。

ジョウンは兩腕を差し上げて、聖母の像の前へ行つて、人間性の絕望を見まいとする。

兵士　(話を續けながら) とにかく、地獄は俺の氣に入つたよ。一日休暇を貰つても、初めのうちは雨の降る日曜のやうに退屈なもんだつた。だが、今ぢや大して氣にもかけなくなつた。俺の好きなものは何でも、欲しいと思ひさへすれば手にはひるつてことだがなあ。

シャルル　地獄つてどんなだい。

兵士　あんたも、さう惡いところとはお思ひにやなりますまい。面白いところでさあ。心配もなきや、飲代(のみもの)の工面もしないで、しよつちゆ醉つぱらつてるやうなもんですよ。御歷々の方々

もゐられる。帝王だとか、法王だとか、王様だとかがね。あの連中と來ちや、俺があの若い娘つ子に十字架をくれてやつたつてんで、俺を口汚く野次るんだ。だが、俺は何とも思ひやしない。俺はあいつ等を向うへ廻して、あの娘はお前さん方よりは十字架をもつ立派な權利があればこそ、お前さん方の來るやうなところへは來ないんだい、と大見得を切つてやりましたよ。するとあいつ等は啞然となる。それだけのことでさあ。あいつ等の出來ることつて言へば齒をぎりぎり言はすだけさ、地獄風にね。そこで俺は笑つてやるだけで、昔馴染みの唄をうたつて、さつさと引上げてしまふのさ、ラム、タム、トラムプレ――おおつと、誰か戸を叩いてゐますよ。

一同耳を澄す。長い優しいノックする音が聞える。

シヤルル　おはいり。

戸が開く。老いた牧師がはひつて來て、足早にジョウンに近づく。彼は髮は白く、背は曲り、間抜けた然し人の良さうな微笑を浮べてゐる。

闖入者　御免下さい、みなさん。お邪魔ではないでせうか。わたしは哀れな害にもならぬ老ぼれのイギリスの牧師です。以前は大僧正に、即ちウインチスタアの閣下に從屬する牧師でした。ジョン・ド・ストガンバアでございます。（何か尋ねるやうな樣子で一同を見て）何か仰しやつたのですか。わたしは、不幸にして、どうも耳が少し遠いもんでして。ほんの少しなんですが――なに、心の正しい時はさうとは限りません。でも、何と言つても、人間の單純な、少さな村ですからね。わたしは滿足してゐます、滿足してゐますよ。村の人間はわたしを愛してくれますので。それに、わたしはほんの少ししか役に立ちませんし。なに、わたしは親類がよくて、みんなわたしを勝手にさしてくれるんです。

ジョウン　まあ、可哀さうな年寄りのジョンだね。どうしてそんな風になつたの。

ド・ストガンバア　わたしは信徒によく〳〵氣をつけなくちやいけないつて言ひきかせるのです。わたしはみんなに向つてかう言つてやります、「お前たちが心であゝやかうと思ふ事も、眼で見さへすれば、すつかり考が變るものだ。それはお前たちに大きな感動を與へるだらう、大きな感動を」つてね。さうしますと、奴等はみんなかう申すんです、「さうですとも、牧師さん手前どもはみんな、あんたが親切なお方で、蠅一匹だつてお殺しにはならないのを存じてをり

ます」つてね。かう言はれるのが、わたしにとつては何とも言へない樂しみです。實際、わたしは生れつき殘酷な人間ぢやないのです。

兵士　誰がさうだと言つたんだい。

ド・ストガンバア　そりや成程、わたしは殘酷つてどんなものだか知らなかつたために、非常に殘酷なことを遣つたことがあります。それはわたしが見た事がなかつたからでした。それが大事な點です。あなた方は是非眼で御覽にならなくちやいけません。見さへすれば、あんた方は救はれるのです。

コオシヨン　あなたにとつては、我等の主クリストの受難の苦しみだけでは十分ではなかつたのですか。

ド・ストガンバア　さうぢやありません。決してそんな事はありません。わたしはそれを繪で見、書物で讀んで、深い感動を受けたのは事實です。然し、それは何の役にも立たなかつた。わたしを救つたのは、我々の主ではなく、實際燒殺されるのをわたしが目擊した若い女でした。それは、恐ろしい、實に身の毛のよだつことでした。然し、わたしはそのために救はれたので

す。それ以來わたしは別人になつた。時にはわたしの分別が少しばかり間違ふこともあるにはありますが。

コオシヨン　では、想像力の無い人間を救ふために、何時の時代にでもクリストのやうな人が苦しみのうちに死なねばならないのですか。

ジヨウン　でも、この人があたしには殘酷でなくとも他の人々に殘酷だつたとすれば、あたしその人々を救つたのだつたら、あたしの火焙りも無駄ではなかつた譯だわ。

ド・ストガンバア　いや、あの娘はお前さんぢやなかつた。わたしは眼が惡くて、どうもよくお前さんの姿を見分ける事が出來ない。だが、お前さんはあの娘ぢやないよ。いや、娘ぢやないよ。あの娘は燒殺されて灰になつてしまつたのだ。死んでしまつて、もうゐはしないのだ。

死刑執行人　（シヤルルの右手の寢臺のカアテンから歩み出る。寢臺は二人の間に挾まれる譯である）どうして、どうして、あの娘は君よりはずつと命がある。あの娘の心の臟は燃えはしないし、水の中でも滅びはしないのだ。わしは死刑にかけては天下の名人で、巴里の先生よりも、ツウルウズの先生よりも腕が上なのだ。而も、そのわしさへあの乙女を殺すことが出來なかつた。

あの娘は、到る處に現はれ、到る處に生きてゐるのだ。

ウオリク伯爵　（反對側の寢臺のカアテンから勢よく進み出て、ジョウンの左手へ來て）君の名譽恢復をお祝申します。どうもわしは、君にお詫びしなけきならない。

ジョウン　あら、どうぞそんな事は仰しやらないで。

ウオリク　（愉快さうに）あの火焙りは全然政治的なものだつたのだ。明言するが、君に對する個人的な怨があつた譯ぢやない。

ジョウン　あたし惡く思つてやしないわ、殿樣。

ウオリク　さうあるべきだ。わしをそんな風に迎へてくれるなんて、君は實に親切だ。育ちのいゝ證據だ。然し、わしは十二分に詫(あやま)らなきやならない。政治上の必要は、時としては政治上の失策になると言ふのは眞理だ。そして、あの場合は實に大失策だつたよ。と言ふのは、我々が火焙りを行つたにも拘らず、君の精神が我々を征服してしまつたんだからなあ。歴史の上では僕は君のお陰で思ひ出されるだらう。そんな風に思ひ出されるのは、どうもあんまり有難くはないが。

ジョウン　成程、そりやさうかも知れないわ。可笑しな人ね、あんたは。

ウオリク　でも、みんなが君を聖者にすれば、君の聖者の後光はわしのお陰だよ、あの好運な帝王の冠が君のお陰を蒙つてゐると同じやうにな。

ジョウン　（彼に背を向けて）あたしは誰にもお陰を蒙りやしないわ。あたしの心の中にあつた神樣の精神に萬事お力になつてゐるんだわ。でも、あたしが聖者になつた場合を考へて御覽。たかが田舍娘のあたしが、聖キャサリン樣や聖マアガリット樣と並んで威張り腐つてゐたら、あの方達は何と仰しやるだらう。

僧侶風の紳士が一人、一九二〇年型の、黒いフロックコオトにズボン、シルクハットの服裝で、突然彼等の前に現はれ、彼等の右手隅のところに立つ。一同彼を見詰める。軈て、どつと笑ひこけてやみさうにもない。

紳士　この騷はどうした譯です、皆さん。

ウオリク　やあ、これはどうもなかなか滑稽な衣裳を發明なさつたものですね。

紳士　わたしには何を仰しやつてゐられるのか分りません。あなた方こそみんな可笑しな服裝

をしてゐられるぢやありませんか。わたしは普通の服裝をしてゐるのです。

デュノア　どんな着物だつて可笑しな着物でないのはない、我々の自然な皮膚を除いてはね。

紳士　御免なさい。わたしは此處へ重大な用向で參つたので、詰らない議論をしてゐる譯にはゆかないのです。（彼は一枚の書面を取出して、不愛想なお役目らしい態度をとる）　わたしは次の事を諸君に報告せんがために遣はされたものであつて、以前は單に「娘」と呼ばれてゐたジョウン・オブ・アルクは、オルレアンの僧正の設定せる裁判の主題となり——

ジョウン　（口を挾んで）あら！　オルレアンではまだあたしを憶えてゐてくれるの。

紳士　（口を挾まれたのを怒る樣子で、力を入れて）——そは、オルレアンの僧正が、聖者の列に加へられたしと言ふ上述のジョウン・オブ・アルクの要求に從ひしものにして——

ジョウン　（又口を挾んで）でも、あたしそんな要求をしやしないわ。

紳士　（以前と同樣に）——そこに於てか教會は、この要求を一般の手續に從つて餘すところなく調査し、上述のジョウンを尊貴（ヴェナラブル）より更に神聖（ブレスト）の位へと進む事を認め——

ジョウン　（くつくつ笑つて）あたしがベエナラブル！

紳士　——終に、彼女に英雄の德を授け、個人として神の啓示を見る事を嘉みすることを宣言し、天上教會の結合に於て上述のベエナラブルにしてブレストなるジョウンを聖ジョウンと呼ぶものである。

ジョウン　（有頂天になつて）聖ジョウン！

紳士　每年五月三十日をして、神の最も祝福されし娘を記念する日として、あらゆるカソリック教會に於て、この世の終るまで、彼女を記念する特別の祭典を擧ぐるものであつて、彼女のために特別の禮拜を行ひ、あらゆるカソリック教會の祭壇に彼女の聖像を安置する事を、法則に據つて定めるものである。而して、信徒にして、跪いて彼女を通して「慈悲の御座（マアシイ・シイト）」へ祈りを捧げるのを、正當にして奇特なる事とされるのである。

ジョウン　あら、そんな事。跪くのは聖者にするものだわ。（彼女は跪く、依然として有頂天の樣子）

紳士　（書面を納めて、死刑執行人の傍へ退いて）バシリカ・バチカナに於て、一九二〇年五月十七日。

デユノア　（ジョウンを起上らせて）君を燒殺すのは半時間で澤山だつたが、君の眞理を見出すには四世紀かゝるのだ！

ド・ストガンバア　わたしは以前はウインチスタアの大僧正に仕へる牧師でした。みんなはあの方を何時でもイギリスの大僧正と呼んでゐました。ウインチスタアの大伽藍にあの乙女の美しい聖像を見るなら、わたしやわたしの大僧正にとつては何といふ悅でせう。あすこには乙女の聖像が置かれるでせうか、如何でせう。

紳士　あの建物は一時アンジエリカの異端の手に歸した事があるから、わたしには何とも受合へませんよ。

ウインチスタアの大伽藍にある像の幻影が、窓を通して見える。

ド・ストガンバア　あゝ、御覽！　御覽！　あれがウインチスタアだ。

ジョウン　あれがあたしなの。あたしは硬くなつて立つてゐる。

幻影は消える。

紳士　わたしは、フランスの當局から、乙女の立像があんまり增加すると交通の妨害になると

申述べてくれと要求されてゐます。當局に對する一應の禮儀としてこれを申しますが、然し、乙女の馬を建てることはどの馬よりも交通の妨害になるものではないと、教會のために申上げておかなければなりません。

ジョウン　まあ。あたしうれしいわ、みんながあたしの馬をまだ忘れずにゐてくれるなんて。

ランスの大伽藍の前に立つてゐる像の幻影が現はれる。

ジョウン　あの小さな變なものもやつぱりあたしなの。

シャルル　あれは、君がわしを位につけてくれたランスの大伽藍だよ。ありやたしかにお前だ。

ジョウン　あら、誰があたしの劍を折つたの？　あたしの劍は決して折れやしなかつたのに。フランスの劍だもの。

デユノア　氣にしないでいゝよ。劍は修繕する事も出來るのだ。君の魂は折れやしないよ。君はフランスの魂だ。

幻影は消える。大僧正と宗教裁判官の姿が今やコオションの左手に見える。

ジョウン　あたしの劍はこれからもまだ征服するでせう。決して人の血を流さなかつた劍だ。

みんなはあたしの肉體を滅したけれど、あたしは魂のうちに神樣を見たんだ。

コオション　（彼に跪いて）野の娘達は御身を讚美してゐる。何故と言つて、御身があの娘達の眼を讚めたゝへたからだ。そして、あの娘達は自分と天國の間に何の隔りもないのを知つたからだ。

デュノア　（彼女に跪いて）死にかけてゐる兵隊達は君を賞讃してゐる。君はあいつ等と審きの間にある榮光の楯だからなあ。

大僧正　（彼女に跪いて）教會の王子たちは御身を讚めたたへてゐる。何故なら、御身は現世の煩惱が泥濘を曳摺り廻した信仰を救つてくれたからだ。

ウオリク　（彼女に跪いて）狡猾な顧問官達は君を讚めてゐる。あいつ等が自分の魂を結びつけてゐた結び目を、君が切つてやつたからだ。

ド・ストガンバア　（彼女に跪いて）死の床に横たはつてゐる馬鹿げた老人達は、あなた樣を讚めそやしてをります。あなたに對するあいつ等の罪が祝福に變じたからです。

宗教裁判官　（彼女に跪いて）盲目で法律の奴隷である裁判官達は御身を讚美してゐる。御身が

生きた魂の幻と自由を擁護したからだ。

兵士　（彼女に跪いて）地獄の惡黨達は君を讚めてゐますよ。消えない火は神聖な火だと言ふ事を、あいつ等に敎へてやつたからだ。

死刑執行人　（彼女に跪いて）拷問役や死刑執行人の連中はお前さんを讚めそやしてゐるよ。お前さんが、あいつ等の手は人間を殺しても罪にはならないつて事を見せてくれたからだ。

シヤルル　（彼女に跪いて）內氣な人間達は、君を賞讃してゐる。內氣な人間ではとても重くて背負へない英雄的な重荷を君が背負つてやつたからだ。

ジョウン　みんなしてあたしを賞讃するなんて、あたし悲しくなつちまふわ。あたしは聖者で、聖者達は奇蹟を行ふのを忘れないで頂戴。屹度ね。ところで、どうでせう、あたしが死から甦つて、生きた女となつて、あんた方のところへ歸つて來たら？

一同吃驚仰天して躍び上り、急然暗闇が部屋の壁を消してしまふ。ただみんなの姿と寢臺だけが見える。

ジョウン　どうしたの。あたし、又火焙りにならなくちやいけないの。誰もあたしを悅んで迎

へてはくれないの。

コオション　異端者は何時だつて死んでゐた方がいゝんだ。それに、神ならぬ人間の眼では聖者と異端を區別する事が出來やしないのだ。どうか 容赦して貰ひたい。（來た時のやうに出て行く。）

デュノア　許してくれ、ジョウン。我々は君に對しちやまだ十分いゝ人間になつてゐないんだ。僕は自分の寢床へ歸るよ。（出てゆく）

ウオリク　我々は小さな失策を仕出かしたのを心から遺憾に思つてゐる。然し、政治上の必要は、時には誤りを犯すことあるが、是非行はなければならないのだ。だから、君が大いに親切でわたしを許してくれるなら――（氣をつけながらこそこそ出てゆく）

大僧正　君が歸つて來ても、君が何時か話してくれたやうな人間にわたしはなれはしないだらう。わたしが言へる事と言へば精々で、わたしは君を祝福する勇氣はないが、何時かは君の祝福に浴したいと思つてゐると言ふことだ。然し、それまでは――（出てゆく）

宗教裁判官　わたしはもう死者となつてゐるのだが、あの火焙りの日に君に罪のない事を證言

してゐたのだ。然し、現世のやうな狀態では、宗教裁判なしではとても濟ませまいと思ふ。だから――（出てゆく）

ド・ストガンバア　あゝ、この世へ歸らないで下さい。あんたは歸つてはいけないのです。わしは平和のうちに死なければならない。わしどものをります間は平和を與へて下さいまし、おゝ、主よ！（出て行く。）

紳士　君を聖者の列に加へた今度の裁判では、君が復活する事の出來るのを豫定には入れてなかつた。わたしは別の命令をいろ〳〵受けてゐるから、羅馬へ歸らなきやなりません。（形式的に挨拶して、退出する）

死刑執行人　こいつあ、わしの職業に關係あることだから、利害問題を考へない譯にはゆくまい。それに、何と言つても、わしの第一の務は、妻や子のためをはかることだ。わしはゆつくりとこいつを考へてみなくちやならない。（出てゆく）

シャルル　可哀さうなジョウン。みんな君から逃げて行つてしまつたね、殘つてゐるのは、十二時打てば地獄へ歸らなくちやならないこの惡黨だけだ。ところで、わしはジャック・デュノア

の例にならつて、やつぱり寝床へ歸るより外に、どうも仕様がないよ。（寢床へ歸る）

ジヨウン　（悲しさうに）お休み、シヤアリイ。

シヤルル　（枕に埋まりながら呟く）おやすみ。（彼は眠る。暗闇が寢臺を包む）

ジヨウン　（兵士に向つて）ところで、お前さんは、あたしのたつた一人のお友達なの、聖ジヨウンのために、どんな慰を持つて來てくれたの。

兵士　どうだ、あいつ等みんなどんな値打があるんだい、あの王様達に、將軍連に、僧正達に、裁判官達なんかがさ。あいつ等と來ちや、君が溝へ落ちて血を流して死んだつて、うつちやつておく人間だ。だから、あいつ等どんなに威張りくさつてゐようと、この次にあ地獄でお目にかゝりませうつて奴さ。ところで、俺の言ふことは、あいつ等にも自分の考を言ふ權利があるやうに、君も君の考を言ふ立派な權利を持つてゐるんだ。多分ずつといゝ權利をな。（この論題について一場の講演をしようと構へて）君にも分るやうに、かう言つたものさ。若しも――（眞夜中を報ずる最初の音が一つ、遠くの鐘から柔かに響いてくる）もう失禮しなくちや。命令上止むを得ず――（爪先で出てゆく）

最後に殘つてゐる光が集つて、一條の白い輝きとなつてジヨウンの上に注がれる。時を報ずる鐘の音は續く。

ジヨウン　おゝ、この美はしい大地をお創りなされた神様、この大地があなたの聖者達を悦んで迎へるのは何時のことでせう。あゝ、主よ、何時まで待てばいゝのでせう、何時まで待てば。

譯者覺え書

一、バアナアド・ショウ及び彼の近作「聖ジョウン」に就て、此處に紹介の數行を書くことは、作者及び讀者に對して却つて禮を失する事かと思ふ。我國に未知の作家ならいざ知らず、彼は我國に十分に知れてゐる作家であり、「聖ジョウン」に就ては彼自身序文の中で餘す所なく論じてゐるからである。

一、この作は最近歐米に於ける最も上演數の多い劇と言つて差支なからう。英米は勿論のこと獨逸ではラインハルトやハアグマン、佛蘭西ではピトエフ、露西亞ではタイロフが演出し、その他各都市で演じられてゐる。日本でも近く築地小劇場で上演の豫定である。

一、この譯本は英國版に據り、傍ジイグフリイド・トレビシュの獨譯を參照したが、これはあまり役に立たなかつた。

一、作中の人名その他の固有名詞の讀方は、戯曲中ではフランス讀みと思はれるものはフランス讀みに、その他はイギリス讀みにした。然し、序文では必しもこの統一によつてゐない。

一、特殊な字は卷末に註釋を附す事にした。これは識者には不必要であるが、一般讀者の爲を思つたからである。人名なども一般に有名なものよりもでないものを多く上げたのはこの爲である。

小註

フス(序一) John Huss (1369–1415) はボヘミヤの宗教改革者で、キックリイフ Vyclif の著述をボヘミヤ語に飜譯す。最後に異端として火焙りの刑に處せられる。彼の說を奉ずる一派を Husite と言ふ。

ウイッグ黨(序十二) ウイッグ或はホイグ (whig) は十八九世紀の英國の民權黨を指すものであつて、最初王黨の Tory に反對して起つたものであるが、後の自由黨の起源をなすもの。

サルタアナ saltana (序十三) マホメット教國の王妃或は王女。此處ではジョウンを女マホメットに譬へてかく言つたのである。

スウエデンボルグ(序二〇) Emanuel Swedenborg (1688–1772) 瑞典の神祕家で哲學者。彼の信仰を奉ずる信者が、一七八三年ロンドンで、最初の祈禱會を組織す。この一派の教會を The New Church と言ふ。

コペルニクス(序二〇) Nicholas Copernicus (1473–1543) ポオランドの天文學者。太陽中心

說。

ダニエル(序二一) ダニエルは言ふまでもなく、舊約聖書のダニエル書に出て來るダニエルで彼が見た巨獸の十一番の角(つの)と言ふのは、彼が夢に四個の大きな獸の海から上つて來るのを見たが、その第四の獸には十本の角があり、更によく見ると、人の目のやうな目や大なる事を言ふ口のある角が現はれたと言ふのである。舊約、ダニエル書第七章に委し。

ブロッケン・スペクトル Brocken spectre (序二五) 獨逸のハルツ山の最高峰ブロッケンに現はれる幻で、登山者などの影が雲霧に映じて見えるのである。

ルイ・パストゥル(序二七 序七八) Louis Pasteur (1822–1895) フランスの科學者にして細菌學者。

ボオル・ベル(序二七) Paul Bert (1833–1886) フランスの生理學者にして、政治家。

聖テレサ(序二七) St Teresa (1515–1582) スペインの Carmelite の尼僧、神祕家にして、「十全の道」「魂の城」などの著者。

エヂプス・コンプレックス Edipus complex (序二八) 知らずして父を殺し母と婚した王エヂプスから出た心理學上の言葉で、男の子が母親に異常な愛著を感じ、ために父親を憎むを言

ふ。これに反して、女の子が男親を愛し女親を憎むを、エレクトラ・コンプレックス Electra complex と言ふ。フロイドに從へば、エヂプス・コンプレックスは潛在意識による典型的な夢である。

ラフアエル前派 Pre-Raphaelite (序二九) ラフアエル Raphael 以前の伊太利の繪畫に現はれてゐた眞實さと眞面目さに歸らうとする繪畫上の運動であつて、英國の Dante Gabriel Rossetti, Holman Hunt, John Millais 等によつて一八四七年――一八四九年の間に起されこの團體を Pre-Raphaelite Brotherhood と言ふ。この運動は、文學、ことに詩に於ても起さる。

ガダレエン(ゲラセネ) Gadarene の豚(序三〇) キリストがゲラセネで惡靈に憑れた人を見て、その惡鬼を人間から豚へと追ひ込んだので、その豚の一群が崖から湖水へと駈け下りて溺れた話が新約聖書に見ゆ。(ルカ傳第八章)

ガルトン(序三二) Sir Francis Galton (1822-1911) 英國の科學者にして人類學者。

ロザ・ボンウウル Rosa Bonheur (序三六) フランスの女流動物畫家 (1822-1899)。

ジョルジュ・サンド George Sand (序三六) Amantine L. A. Dudevant (1804-1876) のペン・ネエム。フランスの小說家。ショパンやミユセはその情人。

ジエリコ(エリコ) Jerico (序三九) 古代パレスチナの邑、舊約ヨシユア記第六章に、ヨルユアが太皷の音によつてこの街を占領した記事見ゆ。

ラ・ピユセル La Pucelle (序四六) ボオルテエルがホオマアをもじつて作つた詩であるのは本文に見る通りであるが、ラ・ピユセルなる言葉は、ジョウン卽ちジヤンヌダルクを指すものと見て差支なからう。シエエクスピアの「ヘンリイ六世」(第一部)にも Joan la Pucelle とある。

聖ピイタ St Peter (序四六 二二四) ガラリアの漁夫、十二使徒の一人シモン。

聖ドゥニ St Denis (序四六 一四一) フランスの守護聖者、巴里の最初の僧正。

キシエラ(序四七) Jules Quicherat (1814-1882) フランスの考古學者、ジヤンヌダルク及びコスチユムに關する傑れた研究がある。

マアク・トウエン(序四七) Mark Twain (1835-1910) アメリカの滑稽作者で、「海の彼方の無

邪氣者」（赤毛布）The Innocent Abroad、「アァサ王朝の一ヤンキイ」A Yankee at the Court of King Arthur はその著書。

バイアド（序四九）Bayard（1475–1524）フランスの軍人にして騎士氣質の典型的人物。これから轉じて、英雄的な勇氣と騎士氣質の人を指す。

ブリイク・ハウス Bleak House（序四九）ヂッケンズの小説の題名。（作者ヂッケンズの Brood-stairs に於ける夏の住居から名付けられたもの）エスタ・サムマアスン Esther Sammerson はこの作中に出て來る女。

アルビゼスセズ Albigenses（序五一）宗教史に現はれる宗教改革者の一派で、十一世紀から十三世紀にかけて存在してゐたが、終に十字軍と宗教裁判によつて根絶される。フランスの南部の Albi からこの名が出たのである。

無教會徒 Peculiar People（序五〇）教會組織なく祈禱のみを尊ぶ一宗派で、一八三八年に設立されたもの。

エッディ夫人（序五七）Mrs. Mary Baker Glover Eddy（1821–1910）アメリカの宗教指導者。

基督教精神療法の運動の創始者。

マアキサス Marquesas（序六三）南大平洋にある群島。佛蘭西領。

カリバニズム Calibanism（序六六）Caliban から出た言葉で、カリバンはシエクスピアの嵐 Tempest の中に出て來るプロスペロの奴隷で、母の魔女から悪い性質をうけ、且つ猿よりももつと人間に遠い醜い怪物。

僧侶反對主義 Anti-Clericalism（序六七）僧侶崇拜や僧侶が教育や結婚法を支配するのに反對する主義で、特に歐洲政治では羅馬カソリック教會に反對するものを指す。であるから、ショウがカソリックの僧侶反對主義 Catholic Anti-Clericalism と言ふのは、カソリックが僧侶反對主義なのではなく、カソリックにして而も僧侶反對主義なのを言ふ。

オレンヂマン Orangeman（序六七）プロテスタンテズムの闘士として王 William of Orange の一派を指したのであるが、現在は愛蘭の過激な新教徒を指す。

低教派 Low Church（序六七）アンゼリカンやプロテスタントの教會で、僧侶の教權や聖餐の效力や教會の儀式などを重要視しない一派。

マキアベリ（序六七）Nicollo Machiavelli (1469-1527) フロオレンスの政治學者。

ルビコン Rubicon（序六八）伊太利にある河。シイザアがこの河を渡らなければ志の成り難いのを知つて、これを渡つてポンペイを撃つたのである。ルビコンを渡るとは、意を決して事をなすを言ふ。

ブルノ（序六九）Giordano Bruno(1549-1600)伊太利の哲學者で、異端として火焙りにされる。

ロオド（序七五）William Laud(1573-1645) カンタベリイの大僧正で、最後は彈劾されて斬首になる。

バアトラの有何無鄕（序七七）バアトラSamuel Butler は英國の諷刺作家で、有何無鄕と譯したのは彼の Erewhon である。これは無何有鄕 Utopia 卽ち Nowhere を逆にしたものであつて、社會の矛盾、政治宗教の墮落等を諷刺した作品である。

クエエカ Quaker（序七九）教友派 Society of Friends の會員を指す。これは英國の宗教改革者 George Fox(1624-1691) の設立したもので、戰爭を否定し、衣服の質素、言語の單純を旨とする一派。

星法院 Star Chamber（序八一）往時英國のウエストミンスタ Westminster 宮殿内にあつた裁判所で、その部屋の天井が星で裝飾されてゐたのでこの名が出たのである。その裁判は暴虐と不公平を以て聞え、一六四一年に廢止される。

ガリバルヂイ（序八七）Guiseppe Garibaldi(1807-1882) 伊太利の愛國者で、伊太利聯邦を統一す。

ベテルグウズ Betelgeuse（序九一）Orion 星座で最も大きい淡紅色の星。

シヤトオダン Chateaudun（序九四 三四一）デユノアの城のあつたところで、その城は一八七〇年獨逸軍のために燒拂はれる。

ジヨン・オブ・ゴオント John of Gaunt（序九五）シエクスピアの「リチヤアド二世」の中の人物。ランカスタアの公爵にして王の叔父。

ドレイク（序九五）Sir Francis Drake(1540-1596) 英國の航海者で、海軍司令官。

diabolus ex machina（序九八）machina 卽ち機械と言ふのは、希臘劇に於ける舞臺上部の仕掛の一つで、劇中の人物を空中へ吊り上げる裝置。diabolus はそれによつて現はれた惡魔、

deus は神である。

オベルアムメルガウ Ober-Ammergau（序一〇七）獨逸の地名。現在基督受難劇 Passion の演じられる唯一つの場所で、この地方の農民の手によつて四年毎に行はれる。

ベンド・シニスタア bend sinister（一八八）私生子たる事を示す楯の標章で、左上から右下へと斜めに線を引いたもの。

Sancta simplicitas.（一三三）神聖な單純さ。

ステエションズ・オブ・ザ・クロオス stations of the cross.（一三四）羅馬カソリク教會で、クリストの受難の有樣を十四個の繪に連續させて現はせるものであつて、その前で祈禱が捧げられる。

御告の鐘（二四六）御告の祈 angelus とは羅馬教にて天使ガブリエルが基督降誕を聖母マリアに告げし記念にして、朝、正午、日沒にその祈を告げる鐘が御告の鐘である。

アアサネサス（三〇三）Athanasius (293-373) はアレキサンドリアの僧正。彼の信條は、希臘、羅馬、英國の教會で用ゐられる。

フウケ（三三八）Jean Fouquet (1415-1480) フランスの密畫々家。

トルウバドゥア troubadour（三四四）十一世紀フランスの南部に起つた抒情詩人の一派で、十二三世紀、伊太利、西班牙にも榮えたものである。

慈悲の御座 Mercy Seat（三五五）慈悲の施される處。約櫃（十誡を刻した石を納めた箱）の黄金の蓋で、その上で毎年贖罪の血が注がれたのである。

（見出しの下の數字は頁數）

大正十五年壹月廿八日印刷
大正十五年貳月壹日發行

聖ジヨウン　定價貳圓貳拾錢

不許
複製

著者　北村喜八
東京市外西大久保五〇八
發行者　加藤彰一
東京牛込區西五軒町二九
印刷者　溝口榮
東京牛込區早稲田鶴卷町四〇
製版者　谷口熊之助

東京市外西大久保五〇八
發行所　原始社
振替東京六一三六八番

東京市日本橋區大傳馬町二丁目
賣捌　淺見文林堂
振替東京一〇六〇番

終